平成21年度　第１回三重県教育改革推進会議　議事録

Ⅰ　日　時　　平成21年8月5日（水）　13：30～17：00

Ⅱ　場　所　　プラザ洞津「孔雀の間」

Ⅲ　出席者　（委　員）上島　和久、太田　浩司、奥田　清子、加藤　伊子、川本　健、下里　義治
杉浦　礼子、田尾　友児、高屋　充子、多喜　紀雄、中津　幹、西田　寿美、
浜辺　佳子、日沖　靖、松岡　美江子、皆川　治廣、向井　弘光、
山田　康彦、脇田　三保子
（教育委員）竹下　譲、丹保　健一、牛場　まり子、清水　明
（事務局）向井教育長、山口副教育長
真伏教育支援分野総括室長、松坂学校教育分野総括室長
鳥井社会教育・スポーツ分野総括室長、山中研修分野総括室長
平野教育総務室長、増田人材政策室長、岩間教育改革室長
浅生特別支援教育室長、西口特別支援学校整備特命監
加藤高校教育副室長、福永教育振興ビジョン策定特命監
長崎、北原、川上、安田　　以上４０名

Ⅳ　内　容

（事務局）

皆さんお揃いですので、ただ今から、平成２１年度第１回三重県教育改革推進会議を開催します。

本日は、委員改選後の最初の会議でございますので、会長を選任していただくまでの間、教育総務室の平野が進行させていただきますので、よろしくお願いします。

なお、本日は審議事項（１）にご参加いただくため、教育委員のみなさんにも出席していただいております。開会にあたりまして竹下教育委員長と向井教育長から一言ご挨拶申し上げます。

まずは竹下委員長、よろしくお願いします。

（竹下教育委員長）

今日の資料として配付されております現行の三重県教育振興ビジョンの冊子の中に、三重の教育の目指すべき方向、というふうな形で書かれてある内容、例えば「心を大切にする教育を目指します」うんぬん以下、５つそういう項目が並べられてありますけれども、これは別に三重県のことだけではないです。全国共通する目標であって、三重の教育ということを考える場合には、これに先立つ三重のことを何か考えていただく必要があるのではないかと思っています。そしてその際には、そもそも教育というのはどういうものなのかというところから是非お考えいただきたいと思っています。これは私見ですけれども、教育というものは人間社会を維持するための人間の訓練と言いましょうか、人間の躾、そういう諸々のものですが、要は人間社会を維持するためのいろいろな方策というものの一つが教育であるというふうに考えております。そしてそういう立場から今の日本を考えますと、ちょっと恐ろしい現象が出てきているなと正直感じております。三重が一番その劇的な地域ではなくて、三重はまだ良いほうなんですけれども、九州とか東北とかあるいは四国とかそういう地方に行けば行くほど、三重と同じような現象なのですが、もっともっと大変で深刻な現象が起こっていると思います。その現象というのは、いわゆる農村集落の崩壊という現象です。今の言葉で言いますと限界集落ということになりますが、限界集落というのは年寄りばかりが多くなってきているということなんです。その集落がそろそろこれから滅んでいくそうです。三日ほど前にそういう話を聞いておったのですけれども、今そういう農村集落というのは 13 万 5163 あるそうなんです。今これがどんどん減っていっているそうなんですが、今までこの９年間でもどんどん減ってきたんですが、もう 11 年後、2020 年には 11 万 5,000 ぐらいになっているということです。要は２万集落以上崩壊してしまうというか、なくなってしまっているというようなことが、今、起こりつつあります。だから、なくなっていないところも、それこそ限界集落どころか、臨界集落に近い状況になってしまっているというのが、これから起こる現象だそうです。しかしこれは東京で言っても、東京でどんなにそういうことを主張したとしても、ほとんどの方は耳を貸しません。あまりピンとこないです。東京のほうは人口が増えているという状況です。

しかし、地方の農村集落はどんどんなくなってきているということがあるんですけれども、こういう集落は、江戸時代の人口 3,000 万未満のころにでき上がった集落です。それがちょっと今減りつつありますけれども、それでも、１億 2,600 万人の人口がいるという中で集落が崩壊しつつある。こういう現象をもうちょっと、地方に住む我々は深刻に考えるべきではないかと思います。何か足元からどんどんどんどん切り崩されているような気がする。どんどんと日本人は大都市に集中し、大都市の中でも東京圏と大阪圏と名古屋圏に集中し、その中でも東京圏のほうにどんどん集中していっているという現象があります。

こういう現象の原因の一つに教育があるのではないかというふうに私は考えております。非常に画一的な教育を我々は今までずっとしてきた。あるいは、そういう教育を受けてきた。日本の国民の教育というのは非常に画一的な教育です。そして、どこの小学校でも同じことを習い、どこの中学校でも同じことを習い、高校でも同じことを習うと。ようやく違うのが高校で、商業高校とか工業高校とかでちょっとは違ってくるということがありますけれども、もうちょっと違うようになってくるのが、ようやく大学になってからであるという非常に不思議な教育を日本はしてきている。これは日本人の多くは普通の現象だ、当たり前ではないかと、教育は日本の国の仕事じゃないかというふうに思っているんだと思います。

そういう目で見ますと、日本の国民にこういう画一的な教育をしたというのは昭和 16 年からです。昭和 16 年に国民学校とういうのができます。皆さん方の中にも、名前は知っている方がおられるかもしれません。それまでは尋常小学校というふうに言ったんですが、昭和 16 年に国民学校というふうに名前を変えます。これは名前を変えただけではなくって、中身を変えたんです。このモデルになったのはドイツの教育でして、しかもその直前に現れたヒットラーが作った教育というふうにも言われておりますけれども、全国民に同じことを教えるというものです。１学年、２学年、３学年という形で区切っていって同じ内容のことを教え、国民を同じような発想の人間に仕立てあげていくというふうにしたのがヒットラーだというふうに、現実に整理されていますし、分析もされておりますけれでも、それを日本はいち早く導入します。

こういう導入をしているのは、それ以後、他の国ではそれほどはありません。北欧の国々は若干それを導入したというふうに言われておりますけれども、他のヨーロッパの国はドイツがしたことですから、それこそ反発をして、同じようなことはしていないということがあるわけですけど、日本はそれをいち早く導入し、そのまま実現します。

そして、戦後昭和 21 年、当然これは大きな問題になりましたけれども、結局ＧＨＱも、その当時の日教組も「そのままでいいんじゃないか」、「全部同じように教えるのがいいんじゃないか」、「文部省でその基準を示してくれれば教えやすい」というようなことになりまして、そのまま踏襲されるようになった。

ただ、このときはまだ地方は非常にふてぶてしくというか、ずうずうしいというか、あるいは、あまり言うことを聞かないというふうな体質を持っていまして、三重県もそうだろうと思いますけれども、各地方ばらばらの教育をしています。そんなには統一されていない。一応、文部省が示す方針にのっとってやろうという態度は表面的には示すものの、中身はあんまりしていなかった。

ただ、それが完結するようになっていったのは、これは日本国民がそういうふうなことを要求したせいもあるんですけれども、高度経済成長期の後半ごろであった。国民の大移動があります。そして、その中でどんどん人々が動く、そういう中で学歴社会というのが起こってまいりました。そこから東京の大学に、できれば東京大学に入るにはどうしたらいいかというふうなことから、「日比谷高校と同じ教育を地方でもやってくれ」、「番町小学校と同じ教育を地方でもやれ」、「麹町中学と同じようなことをやれ」というふうな運動が国民の間から起こってきまして、当時の文部省はそれに従って今のような学習指導要領を作り上げた。それまではそういう名前のものがありましたけれども、なにか非常に曖昧なものであったと言われております。昭和 30 年代後半、大体 40 年代に入ってから、そういうものが完成するようになっていった。

そういう結果、日本人は画一的な教育を受けるようになっていったんですが、それと軌を一にして、地方の農村部の学校の高校に進学するという人たちの数が減っていった。子どもの数が増えていきましたから、絶対的には数は増えていくんですけど、できる子はできるだけいいところへ行こうという形で、いい学校へいい学校へというふうに進学をしていく。取り残される子どもたちも、できれば後を追っかけていきたいということがありますから、どんどん都市部のほうに集中していくというふうな現象がありました。これは皆さんも連想してもらえるだろうと思いま

す。
　三重県も南のほうを考えればそうだろうと思いますが、今でも松阪とか伊勢のほうの高校に全部進学をしているというふうな形で、どんどん取り残されていく学校が出てくる。そういうところは高校生の数も減ってきて、統合という形になっていくというふうなことが起こってきて、現在までそれがたどりついていくわけです。このまま放置しますと、これは私個人の心配ですけれども、中勢、あるいは北勢のほうにどんどんと高校生たちが集まってくるような現象が起こるのではないかと思います。そういうことをやっておっていいんだろうかと、皆さんも頭の隅でちょっと考えておいてもらえればというふうに願っているんですね。その中で三重県の教育をどうするか。その次に前回のビジョンにあったような、個人個人をどんなふうに育てあげていくかということがあるかと思います。重要なのは、三重県の教育をどうするかですので、ぜひ、その辺を考えてもらえればというふうに思っております。
　ただ、これはまだ教育委員全員の話ではありません。私個人の話で、教育委員の間でもこの意見はまとめていこうと思っております。ただ、今、緊急に必要なのは、三重県の教育、地方の教育だと思います。と、なれば、画一的な教育っていうものを否定してでも、三重県の教育を考える必要があるのではないか。ということは学習指導要領、ああいうものは絶対的なものだなどと思わず、あれは単に東京の人たちが作り上げた指導要領であるというふうに考えてもらえればと思っています。
　私は、ずっと東京に住んでおりました。東京とか関東に住んでおりましたので、三重県に来たのは９年前です。こちらに来て初めて地方というのは大変だということを実感を持って分かりました。地方の土台が切り崩されていくというのは、これは日本がそれでダメになっていくことにつながっていくだろうと思います。日本をちゃんと維持するためには地方を維持しなくてはならない。そのときには、１億2,000万も人口がいるんですから、3,000万人のころのせめて集落を保てるような、そういう人間を育て上げていく必要があるのではないかというふうに思っておりますので、ぜひ頭の隅に置いてもらって、これからの検討を進めてもらえればと思います。以上です。どうもありがとうございました。
（事務局）
　はい、ありがとうございました。続きまして、向井教育長お願いいたします。
（向井教育長）
　本年度の委員の改選を行いました。新しいメンバーでの第１回三重県教育改革推進会議の開催にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。竹下委員長からは日本の教育の歴史的な意義なり、いろんなことをお話ししていただきました。
　一定限、日本の高度成長を成し遂げたという成果もあろうかと思いますが、いろいろな弊害というのもあった中で、国におけます教育法の改正とか、教育三法の改正とかが出てきたんだと思っております。そういう改革を進めていく中ではございますが、特に昨今の経済情勢の中で、格差というものが教育に及ぼす影響といったものも大きな議論になっております。国におきましても、『教育安心社会の実現に関する懇談会』というものも開催されております。そういう中で、質の安心、心の安心の両面について、社会全体で支えていく必要があるというふうなことも言われております。
　一面、日本は一定の成果をあげてきたが、現実ではこういった格差もできている。こういう中でいろんなことについて、国によって様々な教育改革が進められております。そういう中で、三重県の教育も今後、どういう方向を目指していくのかというところを、皆様方自分のお気持ちに正直に議論していただきたいと思っています。それぞれの立場の方に、集まってきていただいております。そういうそれぞれのお立場と、それから、個人個人の思いもあると思うんです。そういうものも一緒に出していただきながら、本当に虚心になって、今現在の教育についてのいろんな課題についてお話し合いをいただいて、そして、最終的には三重県の『しあわせプラン』を踏まえて教育をどのように行っていくかという長期的なプランを、ぜひ作り上げていただければと思っております。
　特に、国のほうでも、今、盛んに人間力ということが言われております。やはり、そういうものにつきましても、高い学力を目指していく中で、いろいろな課題が起こっているという状況です。一番の視点は何だろうかと考えると、やはり将来の日本を支えていく、日本の社会の構成員として自分の実力を発揮していく、そういう子どもたちを育てあげていくというのが教育の役割だと思っております。環境というのは大きく変わっていくものでございますが、やはり教育の中

では絶対変わらないものがあります。私としては子どもたちの成長だというふうに思っております。

そういう中で何が求められ、そして、三重県としてどういうものを目指していくのかというのを明らかにしていく。それを目の前へ出して、今後具体的にはどんなものを日々、年度年度考えていくのか、そういうものを教育にご意見としていただきたいと考えおります。

前回の教育振興ビジョンにつきましても、10 年経ちまして、実際ではどうだったのかという、まず検証が必要だと思います。前回の教育振興ビジョンの中で目指していたものがどこまで実現できて、そして、新しく課題として出てきたのは何なのか、そういうものを検証しながら、新しいものを作っていく土台としてそれを活用しながら、進めていきたいと考えております。ぜひ、よろしくお願いしたいと思います。

（事務局）

ここで、三重県教育改革推進会議の設置趣旨につきまして、簡単にご説明申し上げます。

今、学校を取り巻く環境が激しく変化する中で、教育には子どもたちや保護者、地域の方々から様々な期待や要望が寄せられています。そこで、今後、三重県の教育のあるべき姿につきまして、学識経験者や県民の方々に、三重の教育のあり方を広い視野から検討していただくということを目的に、平成 19 年７月に設置されたものでございます。

それでは、次に委員の皆様の任命となります。

教育長、お願いします。

（教育長）

お一人ずつ辞令をお渡しさせていただくのが本来ではございますが、事前に皆様方の机の上に置かせていただいております。それをご確認いただきまして、誠に失礼だと思いますが、任命に代えさせていただこうと思います。２年間よろしくお願いいたします。

（事務局）

続きまして、本日、ご出席の皆様の自己紹介に移りたいと思います。教育に対しますお考えにつきましては、また後ほど、審議のほうに入った段階でお時間を取りたいというふうに考えておりますので、ここでは簡単な自己紹介ということで、よろしくお願いしたいと思います。

まず、教育委員の皆様、竹下委員長からお願いいたします。

（竹下委員長）

今、教育委員長をさせてもらっております竹下です。よろしくお願いします。

（丹保委員）

教育委員の丹保でございます。よろしくお願いいたします。

（牛場委員）

教育委員の牛場でございます。よろしくお願いいたします。

（清水委員）

教育委員の清水でございます。よろしくお願いいたします。

（教育長）

教育委員であります、教育長向井でございます。

（事務局）

続きまして、上島委員様から座席順、時計回りで自己紹介をお願いいたします。

（委　員）

名張市教育委員会教育長の上島でございます。県内の 29 の市町の教育長を代表して、この会に出席させていただくということでございますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（委　員）

三重県ＰＴＡ連合会副会長の太田でございます。平成 25 年に実は伊勢の地を中心に全国のＰＴＡの大会がやってまいります。また、県のほうにも、各市町村のほうにも、いろいろなことでご厄介になるかなと思います。よろしくお願いをいたします。

（委　員）

相可高校の奥田と申します。私は現場の教員の声を代表して発言をさしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

（委　員）

三重県国公立幼稚園長会の加藤伊子です。よろしくお願いいたします。国公立の幼稚園長会では、来年度、22 年度の７月 25、26 日に東海北陸国公立幼稚園研究協議会三重大会を松阪市のほう

で開催します。県の教育委員会、市町の教育委員会、また、それぞれの皆様にもご迷惑をかけると思いますけど、よろしくお願いいたします。

（委　員）

桑名高等学校の川本でございます。県立学校長会の代表ということで参加させていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

（委　員）

三重県高等学校ＰＴＡ連合会会長をさしていただいています下里です。２年間、高校生の保護者の立場として保護者の声を代表し、また、個人的にいろいろ考えていることもございますので、一生懸命がんばっていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

（委　員）

高田短期大学オフィス情報学科の杉浦と申します。高田短期大学は子ども学科、人間介護福祉学科、オフィス情報学科と３学科ありますが、そちらのオフィス情報学科でマーケティングをメインにいたしまして、経営学、経済学を担当しております。

先ほど、竹下委員長さんから地元の産業、経済を支えるというふうなお言葉もありましたが、３月末までは百五経済研究所の方で、そういった産業、経済の調査をしておりました関係で、来年度からは地域産業論なども担当していく予定をしておりますので、そういったスタンスから、この委員会で発言をしていければなというふうに考えております。よろしくお願いいたします。

（委　員）

田尾と申します。先ほど、竹下委員長が言われました一番大変な県の南、紀宝町からやってきました。また、その一番大変な高等学校のほうで学校運営協議会の会長もさせていただいております。この紀南高校を立て直すために一生懸命がんばっていますので、よろしくお願いします。

（委　員）

茶道家という大層な所属と職名をつけていただいておりますので、これを送っていただいたときに、さて今日は何を着ていこうかと迷いました。でも、暑いのでやはり服にさせていただきました。私自身、今、鳥羽に住んでおりまして、鳥羽、伊勢、志摩が生活圏内になっております。そこの小学校の子どもたちを対象に、伝統文化子ども教室という文化庁からの委嘱をいただきながら、茶道の指導をやっています。私の所属しているところでは、約 12 校、私一人ではございませんけれども、いろいろ分担で行っております。その子たちと触れ合うというのが、私の今唯一の子どもたちとのふれ合いの場になっております。孫は別ですが。

（委　員）

多喜紀雄と申します。40 年間病院小児科医をしておりましたが、約４年前に国立病院機構三重中央医療センターを退職いたしました。現在は小児科医としては、小学校の校医、幼稚園・保育園の園医しております。その他、夜間子ども医療ダイヤル、１歳半・３歳児の健康診断等に携わっております。退職前に勤めておりました三重中央医療センターには、入院され最善の治療を行っても障がいを残してしまうお子さんがおられます。また一般外来を受診される障がいをもったお子さんと出会うこともありました。そのような障がいをもった子どもさんが地域で、保育園・幼稚園で、特別支援学校で大変お世話になっております。そのような過去の経験から障がい児教育については大変興味を持っております。

また、学校教育全般についても小児科医・校医の立場から関心を持っておりますので、私なりの意見を申し上げたいと思っております。

よろしくお願い申し上げます。

（委　員）

セントヨゼフ女子学園の校長をしております中津と申します。どうぞよろしくお願いします。私は私学の立場から三重県の教育を考えて発言させていただきたいと思います。三重県にまいりましたのは 40 数年前なんですが、そのときに、竹下委員長が言われましたように、三重県は違うんだなと随分驚かされたことがいっぱいありました。大体兵庫県、京都、そういうところで育ちましたので、私学の立場も三重県とは全然違います。で、今もそういう思いを持っておりますので、また発言させていただきたいと思います。

（委　員）

三重県立小児診療センターあすなろ学園の園長の西田と申します。私の分野は児童精神科医という、医学の中ではマイナーな分野なんです。私が 35 年前に三重県で仕事を始めた頃は、本当に子どもたちがあんまり来なかったですね。それが、どんどん豊かになって、子どもが減ったのに、

どうしてこういうふうに行動や情緒や、それから、精神で病んでいる子が来るのかなと思うぐらいの人たちが来ます。それと、発達障がい、情緒障がいや精神障がいをベースに持った子どもたちの治療に関わっていますと、親御さんが元気になり、それから、その子を支える、特に家族を支える地域の方たちが力をちょっと注いでいただくと、子どもはとても元気になるんですね。すごく問題がたくさんあっても、入院治療をして、新しい環境でちょっとやると、割とみんな元の生活に入って、こんなに良くなったんだなと言われる子が多いんです。地域の中で、一般的には児童精神科に行く子は弱く、ハンディをたくさん持っている子と思われているんですけど、その子どもたちにきちっと大人が丁寧な関わりをすれば、普通に生きていけるんですよね。そしたら、もっと健康な力を本来持っていて強いリーダーシップを取れるような普通の子どもたちに、大人が丁寧に関われば、もっと力が発揮できるようになると思いますね。一応元気でやっている子が急にいじめられて挫折する。そういう子どもたちを見ていますと、本来元気な子は人間関係に傷ついてそんなんになるんですよね。で、大人を見ますと、先生も疲れている、親も疲れている。何か本当に生きていくっていうのはどういうことかな、生活するってどういうことかなと思って、改めていつも考えさせられる毎日です。そういう分野から意見を言えばいいのかなと思っています。子どもが少なくなったら、一人ひとりの子どもたちをしっかり大人が育てて、社会でその子どもたちが大人になって、きちんと生活できる人たちにする方が、子どもをたくさん産めというより、よっぽど効率的なのかなと最近思っています。よろしくお願いします。

（委　員）

伊賀からまいりました、伊賀の里モクモク手づくりファームの浜辺佳子と申します。モクモクで 16 年ほど、企画を中心に食育などを子どもたちに教えたりさせていただいております。農村文化や、そういった地域の農村産業なども含めながら、食育、食の教育を中心に行わさせていただければと思っております。よろしくお願いいたします。

（委　員）

三重県の北の端いなべ市の市長をさせていただいております日沖靖と申します。行政に身を置いて 15 年目になります。それと今、大学のアメリカンフットボールというスポーツのコーチ的なことをさせていただいています。また、練習などに参加しておりますけれども、そういった分野でもいろいろ意見も賜り、意見もさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

（委　員）

私も三重県の北部川越町からまいりましたマツオカ建機株式会社の松岡と申します。よろしくお願いいたします。企業の立場として今回は参加させていただいておりますので、私自身もこの中でいろいろ学ばせていただきたいというふうで楽しみにしておりますので、よろしくお願いいたします。

（委　員）

現在、中京大学の法科大学院で憲法、行政、人権を教えております皆川でございます。実は前回も教育振興ビジョンに携わりまして、その当時は松阪大学、現在の三重中京大学におりました。10 年前ですので、随分長いなという記憶がございます。私自身もこの 10 年間、東京駒沢大学に単身赴任いたしまして、中京大学のほうが戻って来いということで、現在、名古屋に住んでおります。ただ、家は松阪市のほうに置いてありますので、私自身は三重県民、松阪市民と思っておりますので、よろしくお願いいたします。

（委　員）

鈴鹿市からまいりました向井弘光でございます。教育長とはなぜか名前は一緒でございますけど、何の関係もございません。席も向かい同士でお話を伺えればと思います。私は企業人として２年間教育改革推進会議委員をやらせていただきまして、本当に皆様方にありがとうございますと言いたいと思います。すばらしい学生さんを私ども企業が受け入れるというふうな形でやっていたわけでございます。今の子は夢がないとか、根性がないとかというふうなことを就職担当の者が言っておりまして、経済界ではですね、「じゃ、皆様方は教育に携わったのか」というふうなきついお言葉もありましてですね、これが携わらせていただく機会となりました。僕らも学生さんを送っていただく皆様方に対して、何かお返しができればということで、一生懸命務めさせていただきます。よろしくお願いします。

（委　員）

三重大学教育学部の山田と申します。私のほうは教育学及び教員養成と関わって、子どもたちの育ちや学生のことなどを考えております。そういう立場から参加したいと思っています。よろ

しくお願いいたします。
（委　員）
三重県小中学校長会副会長の脇田です。今、高岡小学校の校長をしております。どうかよろしくお願いいたします。
（事務局）
はい、ありがとうございました。なお、中村武志委員でございますけれども、本日、急用のために欠席というご連絡をいただいております。
引き続きまして、事務局職員を紹介させていただきます。
（職員紹介。）
また、この会議につきましては公開で行わさせていただいております。ご承知おきのほうをお願いいたします。
それでは、引き続きまして、当推進会議の会長及び副会長の選出をお願いしたいと思います。選任につきましては、お手元の資料のほうでございますけれども、２ページのほうをご覧いただきますと、三重県教育改革推進会議会議条例を添付させていただいております。この条例の第５条第２項に基づきまして、委員の皆様の互選によりまして選任をいただくということになっておりますが、いかがさせていただきましょう。
（委　員）
事務局さんで、何か案があればお願いします。
（事務局）
ありがとうございます。事務局一任ということでございますので、事務局の案を提案させていただきたいと思います。では、会長には山田康彦委員。それから、副会長には向井弘光委員にお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。
（委　員）
異議ございません。
（「異議なし」の発声あり。）
拍　手
（事務局）
ありがとうございます。ご賛同をいただきましたので、お二人には会長、副会長に就任していただくということでよろしくお願いいたしたいと思います。
それでは、ここでお二人に前のほうの席へ移動していただきますので、お願いいたします。
それでは、ここで会長、副会長から一言ずつご挨拶をいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。
（会　長）
今、会長に選任していただきました山田です。どうぞ、よろしくお願いいたします。
教育改革推進会議は、先ほどからのご案内のように、２年前にできまして、こちらは目的として「三重の教育の改革に関する重要な事項を調査審議する」と、そういう重要な役割を持っています。そして、実は三重県では、このように県内の様々な有識者の方が集まって、この三重県の教育の改革を全体に議論をしていく場というのはこの推進会議が初めてだというふうにお聞きしております。そういう点で、本当にいろいろな幅広いご意見をいただきながら、この改革の議論を進めていきたいというふうに思っておりますので、どうぞよろしくご協力のほどお願いいたします。
（副会長）
図らずも副会長という大役を仰せつかりましたが、会長をサポートしてですね、皆様と一緒にすばらしい答申をしてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いします。
（事務局）
ありがとうございました。それでは、以降の議事につきましては、山田会長、よろしくお願いいたします。
（会　長）
それでは、審議に入らせていただきます。ただし、審議に入る前に、事項書の５番に審議依頼という事項がありますが、事務局のほうから審議依頼があるということですので、どうぞよろしくお願いいたします。
（教育長）

次期の三重県教育振興ビジョンの策定にかかる審議について。このことについて下記の趣旨を踏まえ、次期の三重県教育振興ビジョン（仮称）の策定について審議のうえ、ご報告いただきますようよろしくお願いいたします。

三重県は、平成11年３月、本県の教育を推進するための指針として「三重県教育振興ビジョン」を策定し、４次にわたる推進計画に沿って数値目標を示しながら、具体的な施策を展開してきました。少人数教育の推進、入学者選抜制度の改善等の積極的な取組を積み重ねた結果、児童生徒の満足度や学校教育に対する県民の満足度が向上するなど、一定の成果につながっています。

しかしながら、今、時代は激動期を迎えており、教育を巡る課題もますます複雑・多様化しつつあります。子どもたちの学力、体力の低下、社会性や規範意識の希薄化、目的意識や意欲の減退等が指摘され、家庭や地域の教育力の低下も大きな課題として取り上げられるようになってきています。いじめや不登校などの問題は深刻な状況にあり、子どもが巻き込まれる犯罪や事故も多く発生しています。外国人児童生徒や特別支援教育の対象となる児童生徒の急速な増加により、新たな課題も生じてきており、的確な対応が必要となっています。

また、少子化、高齢化、経済・社会のグローバル化、知識基盤社会の到来、雇用形態の多様化、環境問題の一層の深刻化、高度情報化とそれに伴う有害情報の氾濫など、さらなる時代変化に対応した新しい取組が求められています。こうしたことから、三重県ではこれからの時代における教育の総合的かつ計画的な推進を図るため中長期的視点に立ち、本県教育の目指すべき姿とその実現に向けた施策の方向性を示す「次期の三重県教育振興ビジョン（仮称）」の策定に取り組むこととといたしておりますので、その内容についてのご審議及びご報告をお願いします。三重県教育委員会。それでは、お願いいたします。

（会　長）

今、次期の三重県教育振興ビジョン、仮称ですが、の策定に関わる審議を依頼されたところでございます。この教育振興ビジョンというのは、三重県の今後の教育の方向を示す重要なビジョンだと思いますので、ぜひ実りあるご審議をお願いしたいと思います。

それでは、早速、審議事項に入らせていただきます。事項書は６番目になります。それの（１）ですけれども、三重の教育に関わる課題についてということになっております。これについて事務局のほうから資料説明をお願いいたします。

（事務局）

それでは、資料の説明をさせていただきます。別綴じの資料の２というのと資料の３というのをご用意しておりますので、そちらをご覧いただけますでしょうか。中身は多種多様に及びますので、この資料の趣旨だけご説明申し上げます。

まず、資料の２でございますが、現行の三重県教育振興ビジョンの検証を行なった結果を資料としてまとめております。この資料の最初のページにございますように、今の教育振興ビジョンは平成11年度に策定したもので、12年間のビジョンでございました。そこに構成が書いてありますけれども、３つの基本目標、５つの重点目標の下で進めてまいりました。積極的な取組を積み重ねた結果、児童生徒の満足度や県民満足度が向上する等の成果が表れておりまして、めくっていただいた２ページにその数字を示してございます。ご覧のとおり、我々の取組の結果、満足度は向上しつつありまして、成果は上がりつつあると考えております。で、現行ビジョンの体系表は３ページのとおりですけれども、重点目標が５つございまして、この５つの柱ごとにどういう取組をしてきて、今、なおかつ、どういう課題が残っているのかは以下の４ページ以降に取組の５本柱ごとに整理をさせていただきましたので、ご覧いただければと思います。個々の説明は省略させていただきます。

それから、もう１つの資料でございますが、資料の３でございます。これはデータ集でございます。この資料３は大きく２つの項目で構成しておりまして、まず１つめは時代潮流に関するデータでございます。資料の一番冒頭のところをご覧いただくと分かりますが、時代潮流に関するデータは（１）から（８）、少子化・高齢化、それから核家族化の進行に始まりまして、ご覧のとおりデータを示させていただきました。

それから、大きな２番目としまして、教育に絞りまして、教育の現状に関するデータを掲載させていただいています。大きく（１）として、子どもたちの現状ということで、学力とか、体力とかのデータをお示しさせていただいております。それから（２）といたしまして、家庭・地域社会の現状ということで、家庭や地域社会の教育力の低下が言われていますけれども、それに関するデータを示させていただいております。それから、（３）としまして、教育行政の現状という

ことで、いくつかのデータを示させていただいたということでございますので、今日はこの資料をもとに、今の三重県の教育に関しまして、考えている事柄などをお聞かせいただければと思います。どうぞよろしくお願いします。資料の説明、以上でございます。

（会　長）

どうもありがとうございます。実はこの審議事項の（１）の三重の教育に関わる課題についてというところにつきましては、これから教育委員の皆様、それから、この推進会議委員の皆様からいろいろご意見をいただいて、そして、そのご意見から改めてこの三重県の教育振興ビジョンにどのようなテーマを設定していくのということを考えていく、そのような材料にしていきたいと思っておりますので、そういう形でご発言をいただきたいと思います。

それでは、まず教育委員の皆様から推進会議委員に対してメッセージをお願いしたいと思います。最初にいろいろご発言をもういただきましたけれども、竹下委員長からよろしくお願いいたします。

（竹下委員長）

この今日の配られた資料ですけれども、ビジョンの検証、あるいは今の時代潮流、それから、現状の取組に関するデータ、こういう資料がお手元にあると思います。まず、最初のこの資料２のほうからいきますと、確かにこういうような検証の仕方をすると、この結果に出てくる、ここに表記されているような結果になっていくだろうと思います。例えば、満足度というふうなものは出てくるだろうっていうことは言えると思いますけれども、これで本当に満足していいのかなというのが私の非常に大きな懸念です。段々学力もこういうことで上がっていったかもしれません。しれませんけれども、先ほどから話をしましたように、学力は上がった、満足度も増えた。しかし、社会は崩壊していったというのでは、あるいは衰退していったというのでは何の意味もありません。それが確実に三重県に生きるような形の何か指標があればいいんですが、そういうものは多分今のところ、私自身も思いつかない。ということになりますと、こういう資料を基にしてやるんですけど、これで私は皆さん方が「こんだけ満足度高いんだから、それでいいじゃないか」というふうに思われずに、こういう指標で見ればこうなるのかというふうな形から見ていただければと思っています。

ただ、事務局としては一生懸命やっていることは、私もずっと６年間つきあっていますから、それは確かですから、あまり攻撃はしていただきたくはありません。けれども、ただ、見方は皆さん方はこういうふうに注意して、いわばそこから離れたところから、しかも三重県民の立場から見ていただければというふうに願っております。以上です。

（丹保委員）

教育委員になってからいろいろ経験しているところで、いろんな報告をいただくんですけれども、我々教育委員は県民の素人の代表のような形でいるわけですね。だから、ぜひ専門家以外の人にも分かりやすい、そういう報告書を作っていただきたいっていうのが希望でございます。で、どんなに立派なものであっても、一般の人たちによく分からないのでは、やっぱり問題だと思いますし、それから、現場の先生たちも含めてよく分かる、分かりやすいものを作っていただきたいというふうに思います。

例えば、文科省もかつて、『ゆとり教育』っていうようなことをいろいろおっしゃっていたわけですね。ところが、どうもその趣旨が伝わってないんですよね。それで、また、揺れ戻しのようになっていますけど、実際は非常にいい趣旨があったわけで、実際は動いてないところが多いんですよね。でも、世間から見ると、全く別な方向に動いているように見えてしまうと。これはやっぱり最初の広報がどっかできちっとされてなかったんじゃないかという気がします。そういう意味では、いろんな方々がいらっしゃるので、ぜひ、我々素人にもよく分かるような、そういう報告書を書いていただければというのが、最初のお願いでございます。

それから、もう一つは、私もかなり歳をとっていますので、やはり僕も含めて我々の時代の教育現場と、今の教育現場はかなり違っているわけですね。ところが、どうしてもクラスが 50 人ぐらいいて、10 クラスになるとか、子どもたちは丸刈りで坊主頭で先生に非常に素直に従っている、そういうイメージを我々は持っているんです。一部の私学では昔を彷彿させるような立派な教育されているところもあるんですけれども、しかし、今の現場はそういう学校ばっかりじゃない。やはり現場が変わり、親が変わり、場合によっては離婚されている方が非常にたくさんいらっしゃるクラスもあるとかですね、それから、お祖母ちゃんが育てているとか、そういうふうないろんなところがあるわけですね。それで、現場の先生たちが実はそういうことまでフォローしてい

るっていう状況です。僕は学校セイフティネット説というのを立てているんですが、子どもに対するそういうことまで果たしているわけですね。そういう先生たちが非常に多忙化で困ってるというのがデータにも出ているわけですね。ただ、私はぜひ、これから先生を目指す人たちが希望を持てるような、そういう教育現場といいますかね、そういうふうなものを目指していただければ非常にありがたいというふうに考えております。

（牛場委員）

三重県の教育についての課題はいろいろあると思いますが、それを上げて話し合っていただき、いろんな角度からのお立場の方たちがみえますので、子どもたちの将来のためによろしくお願い申し上げます。

（清水委員）

教育委員に保護者の立場としてこの４月から入っておる清水と申します。今日も午前中は地元の中学校のことでいろいろと、前の校長先生と会合をし、昼からこちらのほうへ来させていただいたところです。現場に近いところで、今、学校を小学校、幼稚園、中学校、高校、いろいろと見せていただいております。未来の子どもたちが夢を持てるようなビジョンを、三重県という独自性が出るようなものを、皆さんいろいろとご意見をちょうだいして作っていただければありがたいと思います。よろしくお願いいたします。

（教育長）

今縷々話にも出てきておりますけれども、変わっていく社会、そして、大きく変化している学校現場、そういった中にあっても子どもたちの成長を支えていく、支援していくにはどうしていけばいいのかと、そういうふうな視点でもってですね、さらに大きく変化していく社会情勢、日本社会の中で活躍していく、日本の夢を実現できるような人を育てていく、そういう方策について是非いろいろなご審議を賜ればと思います。よろしくお願いします。

（会　長）

はい、ありがとうございました。それでは、これから推進会議の委員の皆様からご意見いただくわけなんですけれども、特に推進会議の委員の皆様からは、日ごろ、三重の教育に対して感じているところ、そして、今後の教育に求められることですね、そういうことなどについて、お１人３分程度でご意見をいただきたいと思います。先ほど、ご案内さしていただいたように、今後、教育振興ビジョンを検討していくにあたって、どのようなテーマを具体的に取り上げていくのかという点で参考にさせていただくようなことになると思いますので、そういう点で皆さんのご意見、大変重要だと考えますので、ぜひ忌憚のないご発言をお願いしたいと思います。

（委　員）

私、名張市の教育長を拝命してから、この４月から２期目を迎えるところでございまして、教育長の前には、学校現場で校長、そして、教育事務所でおらしてもらって、そこから教育長になったということでございます。そんな中で、自分の歩んできた道も踏まえながらですが、やはり現場を大事にしていこうと思っています。こういう形の中で、毎年、春先にはすべての公立の小、中、幼稚園の授業を見させてもらって、そして、今も最中でございますが、夏休み中は再び学校へも訪問している中で、全員の先生方とお話し合いをさせていただいています。その中から、いろんな課題をこちらとしても把握し、また、現状の状況をつぶさに取り上げていこうということでございます。

ただ、今の自分たちの名張市の状況を見たときに、合併はしておらない単独の市を選んだ中で、大変財政的に厳しい状況です。また、市民の状況を見たときには、一時は大阪、奈良、京都方面のベッドタウンとして全国一の増加率があったわけですけど、今はその逆で、大変激しい減少というような地域であるわけでして、一気に人口も増えた、そして今また逆に減ってきている。その中では学校数も増え、そして、今また逆に減ってきているという状況です。これから先、10 年を見たときには、元々のあった市の状況よりも、まだ少し低くなるという状況であるわけでございまして、現行の経済、社会状況の中では大変厳しい、いろんな課題が山積しているわけでございます。いいことではないわけですけれども、先般も教職員の不祥事があったりして、大変頭を痛めているところでございますが、先ほど言った学校訪問をする中で、本当に私自身の自己満足かも分かりませんが、先生方に元気を出してもらって、その支援をしていこうという体制で取組みをしていることころでございます。

期せずして、今、名張市におきましても、名張市の教育振興基本計画を策定している最中でございまして、この県の委員に選ばれたことにつきましては、大変よかったなと思っているところ

でございます。市はもちろんでございますけれども、広い県下全体のことも聞かせていただきながら、お役に立てるところはしていきたいなと、このように思わしていただいているところでございます。

課題は本当に山積しているわけでございまして、いろんな教育改革がどんどん矢継ぎ早に出される中でございますけれども、現場が本当にどれだけ消化をしているんかということになりますと、疑問を感じます。やはり現場は目先のことが何よりも一番でございまして、学校訪問をしておっても、今、学校の統廃合の問題、適正規模、適正配置、これも検討しているところございますけれども、なかなかそれが見えてこない。これは学校現場、教職員も地域の方も今あるのに満足しきっているという形の中で、もっと先を見据えてどうしなきゃならないのかいうことをきちっとこちらも提示をしていきながら、分かるように、そして、しっかり考えていただく、このことが私は大変大事なことじゃないかなと思っているところでございます。いろんな状況の中で今後、子どもたちの教育はどうあるべきかということについて、きちっと議論をし、そして、方向を定めていかないと、後になって悔いを残すことになりはしないかな、このようなことを考えるところでございます。

そのような中で、やはり三重県全体を見たときに、小中学校あるいは就学前の教育につきましては、設置者の市町が責任を持って担っていかなきゃならんわけですけれども、一定三重県としての基本的な方向を定めていかないと、私はそれぞれの役割が十分果たされないと思っております。市町の果たすこと、県がすべきこと、そして、何より保護者、地域がどうやってそれを支えていくかということをきちっと踏まえてやっていかなきゃならないんではないかなと思っています。

たくさんありますが、細かいこと１つ言いますと、名張市におきましては、例えば、特別支援教育の分野におきましては、10 年前、特別支援学級に在籍する子どもたちは 55 名でございました。10 年経ちました本年度５月では 153 名と、このように児童生徒数は減っておるにも関わらず、逆に特別支援の在籍している子どもが増えているわけです。それは特別支援学級だけではなくって、発達障害を含めた普通学級に在籍している子どもは、さらに多いわけでございまして、このことについてどうやっていかなきゃならないか。当然、県のほうからいろいろ配慮をいただきまして、学級の新増設もしていただいているところですけれども、今の状況を考えたときには、到底やっていけない、いうことでございます。国の教育支援整備も活用しながら、名張市独自として、例えば、介助員制度、あるいは学習サポーターというのを市単で取り組んでいますが、大変厳しい財政の中で、なかなか追いつかない。また、現場では、今ある中で、それは有効に使わせてもらっているけれど、さらに欲しいと言う。限られた人材であるわけですから、きちっと使い方を工夫して、有効活用を考えていただきたいということも、現場へ行くときには話をさしてもらっとるところです。これ一つ取り上げても、本当にたくさん課題があるのではないかなと思っているところでございます。

今後、いろんな分野の中で何を目指すのかをきちっと示していきながら、何よりも保護者、地域の皆さん方、関係者の皆さん方のご理解いただくというのをやっていかなきゃならないのではないかと思っております。市町を支援していただく県の、教育振興ビジョンが本当に実のあるものにならなけりゃならないなと思っています。厳しいかも分かりませんが、今までの振興ビジョンの成果の目標数値を見ても、これほんまに現場とちゃんとうまくいっているのかなと思うところもいくつかあるように思います。そういう点について、今後は自分もその委員として選ばれた以上は、きちっと検証もしながら進んでいきたいなと思っていることころでございます。以上です。

（委　員）

私が申し上げたいことは２点ございます。今日の中日新聞の朝刊に年収が高いご家庭のお子さんほど、大変得点が高いというふうなデータが出ておりました。何が申し上げたいかと言いますと、やはり塾に行かなくても、しっかりと子どもたちが学力を伸ばせる教育をやはり作らねばならないのではなかろうかなと思います。これが私、一番初めに言いたいことであります。

私の子どもは今のところ、３人のうち２人が伊勢の中では一番進学校であります伊勢高等学校へ行っておりますけれども、やはり中にはすばらしく上手に教えてくれる先生もいれば、全く分からない先生もいる。これは現実であります。

この現実を見据えて、第１点目はやはり教職員の皆さんの人事制度というものを、もうちょっと民間の方に近づけてもらえないといけないのではなかろうかというふうなことを前々から申し

上げております。小中学校も然りなんですけれども、やはり校長先生に人事権がない。これがやはり一番大きな課題ではなかろうかなと思います。やはり校長先生の思いがそこの小学校や中学校や高校をつくっていく。これがやはりリーダーシップというものがなせる業でありまして、これなしに、やはりしっかりとした教育、そういったものが私はできないのではなかろうかなと思います。

企業というのは、大企業も中小企業もほとんどは社長一人で決まると言われています。それはなぜかというと、やはり社長のリーダーシップというものがしっかりとしていない会社というものは、潰れていくわけであります。これは私はすべての組織において同じであると思っておりますので、是非とも今後、評価制度ということを、これは抜本的に国全体としても見直していただければありがたいな、そんなふうに思っております。

それと、やはり今の子どもたちに夢がないって、よくおっしゃるわけでありますけれども、それは保護者に夢がないんですね。保護者が大体帰ってきたら、「今日も疲れた」。奥さんが影で、「お父ちゃんこんな大学出ているけれども、こんな程度やわ、給料」。こんなこと言われたら、子どもは絶対に夢なくなるんですよね。これ、戦後、アメリカがやりました、いわゆる拝金主義のなれの果てだと私は思っております。すべてをお金で換算するがゆえに、このような形になっていくわけでありまして、ですから、何が申し上げたいかと言いますと、国のいわゆる文科省がどうこうあれ、三重においては三重において、やっぱりこれからの国や世界で求められる人材というものを大きく子どもたちにビジョンとして示して、そんなふうにどうぞなってってもらえませんかと、なっていこうやないですかというふうな呼びかけをしていただけるような、そんなふうな教育ビジョンというものをお示しいただければ、ありがたいなと思います。

昔、私の小さい頃はまだこういう言葉がありました。「末は博士か大臣か」。私はすごくそれを信じておりましたし、大変いい言葉だなと小さいながらに思っておりました。私は博士にも大臣にもなっておりませんけれども、ぜひともそういったものが必要なんではなかろうかな、そんなふうに思います。

それと、ＮＨＫの番組で、その学校の先輩を招いて、そして授業をしてもらうというふうな番組があります。ぜひとも地域の小中学校や高校においても、別にそんな有名な人じゃなくて私はいいと思います。地域の中小企業の親父であったり、魚屋さんの大将であったり、どういうふうな方でもいいと思うんです。ただ、一生懸命仕事をされて、一生懸命地域のお役に立っている、そんなふうな人の生き様というものを子どもたちに話をしてくれれば、拝金主義というものも少しは是正されるのではなかろうかと、そんなふうな気もいたします。以上２点評価というふうなこと、それから、子どもたちの人生における目的と目標というものに対しての観点から、何らかの施策を打っていただければな、そんなふうに思い発言をさせていただきました。以上です。

（委　員）

私は現在、相可高校に勤めていまして、相可高校というところは普通科と専門学科の３学科がある、今では県に１校しかない学校です。それと、来年度から宮川高校さんと統合するっていう学校になります。その立場で今日は発言さしていただきたいと思うんですが、最近考えていることが大きく３つあります。

１つは、私は食物調理科の主任を今していますが、教育振興ビジョンの第三次、四次推進計画には、専門教育とか、それから特色ある学校づくりと随分いたるところにちりばめてもらってあって、これはもう 15 年前では考えられなかったことですね。15 年前というと専門学科がどんどんどんどんなくなってきている状況の中ですごく寂しい思いをしました。そのことを思いますと、文科省の専門高校に対する力の入れ方、それから、教育委員会の行政のバックアップ、そういったものが非常に今はありがたく思っています。

相可高校でも、地域の方とか、行政であるとか、それから、保護者の方であるとか、いろんな人と交流を持ちながら、一定の成果は出してきているんじゃないかと思うんです。やっぱり教員は、ノウハウがあんまりない。それから、現場にいますと、どうしても日々のことに追われて、そういう知恵もなかなか勉強できないような状況にあります。そういったときに、多気町の場合はやっぱり地域の方とか、行政の方とか、それから、企業の方にすごくご指導をいただいている部分が多くあります。教員はなかなかそういうことを嫌いますので、よくないとは思うんですけれども、地域連携であるとか、行政との連携であるとか、そういったものを教育委員会がもっとバックアップし、今も随分うちなんかしていただいているんですけれども、そういうことが、次期の教育振興ビジョンのほうでもしていただけるとありがたいかなと思います。

それと、そういうふうに特色ある学校づくりっていうのは、一生懸命毎日がんばっているつもりなんですけれども、ちょっと去年あたりから入学者選抜を議論する中で漏れ聞く意見なんかでは、そういうのは一律にという動きがあるやにも聞こえてきます。そこら辺の入学者選抜も、また、考えていただければありがたいというのが１つ。

それから、宮川高校と相可高校が統合します。最初に竹下委員長さんが随分地方の教育っていうことで言っていただいて、すごく嬉しく思ったんですけれども。尾鷲高校から相可高校まで、県立高校１つもないんですね。どなたかも言われましたけど、やっぱり地方へ行けば行くほど、保護者の生活というのは大変ですね。授業料の滞納者も、地方へ行けば行くほど増えているし、そういうところの子が交通費を払って高校へ通わなくてはいけないっていう、そういう現状というのはやっぱりちょっと考えていただきたい。

相可高校は６クラス規模ですと、ちょうどいいんですね。生徒たちがいろんな活動をしていくときに、２クラスくらいだとやっぱり元気が出ない。だけど、それが６クラスぐらいあると、いろんな活動が活発にできる。でも、その一方で教育予算の使い方の中で、津に博物館を新しくっていう議論がありますよね。自分も今の博物館があれではなという思いもすごくあるんですけれども、現場の人間の気持としては、そのうちの予算のいくらかで例えばスクールバスみたいなものを買ってもらって、活動がしやすい、通学がしやすいようなものを考えるとか、そういう教育予算の使い方っていうあたりも、地方の教育にもう少し力を入れていただければなと思います。

それから、３点目、私の持論なんですけれども、部活動が盛んな学校というのは元気があると思うんです。何か最近は社会教育、社会体育に移行してきていますけど、やっぱり教員と生徒が肌を触れ合ってコミュニケーションを持って、部活動で作った力っていうのは結果だけじゃない、子どもたちの将来に大きく影響するものがあると思うんですね。で、そう思うと、事故なんかもありますと、たいへんつらく感じます。部活動を一生懸命、特に野球部などの活動をしている人たちは、遅くまでマイクロバス運転してっていうのがあって、九州であんな事故がありましたし、そういう部活動に対する支援ももっとこういう振興ビジョンにちりばめていただけたらなと思います。思っていること素直に言いました。以上です。

（委　員）

こういう席ですごく緊張しているんですけど、思ったことをお話させていただきます。幼稚園はご存知のとおり、人間形成の基礎を培う大切な時期であるお子さんをお預かりしています。私たちが子どものころは、家の中では父が主になって家庭教育を子どもたちにしていたわけですし、一歩家から外に出ると、地域の人がみんな町ぐるみで子どもたちを育てるという意識も高かったと思います。地域の子育て力、教育力だと思うんですけど、いけないことをしたら自分の家の子じゃなくても「ダメだよ」って注意をされたりとか、いいことをすれば自分の子どものことのように褒めていただいたりというように、地域ぐるみで子どもたちを育てていただいておりました。

今、この審議の依頼書の中にもありましたけれど、学力や体力の低下、あるいは社会性や規範意識の希薄化、目的意識や意欲の減退、あるいは家庭や地域の教育力の低下というようなことがあげられているわけですけど、幼稚園というのは、幼稚園だけで教育ができないわけです。子どもたちも小さいですので、やはりその子どもたちのバックにみえる保護者の方の協力を得ないとできないことですし、地域ぐるみでやっぱり育てていただけないとできません。幼稚園と地域と、そして保護者の方、三者が一体となって進めていくのが幼児教育の一番大事なことだと思っております。

ところが、家庭教育あるいは地域の教育力の低下ということで、まず、出発として私たちは地域や幼稚園、保護者の方に公立幼稚園の良さ、あるいは幼稚園でどういうことをしていかなければならないかということを説明して一緒にやっていきましょうということからスタートしなければいけないわけです。それがとても大変なことで、家庭の教育力を高めるための講演会とか、それとか自分たちから地域の方へ出向いて行って、地域の方の本来持ってみえる教育力や家庭子育て力をいただきながらするっていうような形で、それぞれ各園が特色のある教育活動を行なっています。それと、教育基本法の改正や教育要領の改訂がなされたわけですけど、幼稚園に課せられる責務というのはすごく大きなものがあるように思います。でも、やはり幼稚園っていうのは義務教育ではないですので、文科省のほうで「幼稚園というのは教育の始まりですよ、学校の始まりですよ」って謳ってもらっているんですけど、さて、地域のお年寄りさんにとってみてみると、幼稚園は子どもたちを「守り」してもらうっていうような感覚でしかないです。「幼児期っていうのは学校へつながっていく、学びの一番元のところなんですよ」、「心をつくる基なんですよ」

っていうことの説明を毎年やっているんですけど、なかなか認められない状況です。先生たち、日々、努力をしているわけですけど、その日々努力していることが先生たちにとっては自分たちの資質向上にもつながって、唯一努力が報われるところかなと思うんですけど。園長の立場ではやはりもうちょっと幼稚園の位置づけ、社会全体における幼稚園の本当の必要性、大切さっていうのを、どういうような形をもって啓発していったらいいのかなっていうのが、今一番の幼稚園の課題って感じております。

で、今日、この教育ビジョンとか見せてもらっていたんですけど、幼稚園とか保育園のことで書いてあるのは本当にページ数が少ないですし、この資料でも、小学校へいくのに幼稚園を終了して小学校へ上がる子、保育園を終了して上がる子っていう表ぐらいで、ほとんどなかったので、もうちょっと幼稚園の大切さ、保育園の大切さも、これから義務教育に入るまでの教育として本当に大切なんやっていうことを、もうちょっと何か違う形で啓発できたらいいかなと思っております。以上です。

（委　員）

この会にこういう形で参加をできるということを大変感謝しております。桑名高校は生徒数が1,000人超えますし、職員が100人超えておりますから、もしかして、当然職員の不祥事もあるかもしれませんし、生徒指導があるかもしれません。緊急にそんなことがあって欠席ということになったら、申し訳ないというふうに思っております。

さて私たちの学校では、今年、100周年を迎えます。100周年迎えて、そのことを今、喜んでおるわけですけど。このように100周年を寿いでいる学校がある一方で、先ほどの奥田委員の話にもありましたように宮川高校が統合すると。私はかつて牟婁地区でも校長していましたけれども、当時東紀州には高等学校が５校あったんが、今、３校ですね。で、再編・活性化の計画の中で、一方ではそういう減っていく地域もあるというところは大変気になります。私自身がかつて教育委員会の事務局にいて、活性化の当初から携わって、その基本計画と第１次実施計画を作ってきたということもありますので、そのことには今でもずっと関心を持っておりますし、こだわりも持っております。

一方で東紀州で学校が減っていく中で、紀南高校がコミュニティスクールっていう新らしい取組をされてですね、その結果、学校が活性化し、今も元気でやっていただいておるというところを見ると、学校が減っていくというマイナスもあったけれども、一方でその学校の活性化という面が出てきたというところも嬉しいなと自分では思っているわけです。

もう１つ、この審議会というものをつくるっていう意味についても考えました。新しいビジョンを作るときに、なぜ審議会を作ってするのか。

で、ちょうど今から10年前ですけれども、前回、ビジョンを作ったときにですね、確かそのときの座長をされていた鈴鹿国際大学の学長さんだったと思いますけれども、教員の免許の任期制というお話を強くされました。けれども、当然教員の任期制の話は、当時の法律とは矛盾しておりました。ビジョンの中へは乗っかってこなかったけれども、しかし、いわゆる教育委員会の事務局、あるいはそういう立場の中でいると、あり得ない発想だったというふうに思っているんです。

ですから、今、動いている免許更新制について、10年前に三重県の教育振興ビジョンを議論した、そのビジョンの委員たちの中では、そういう議論があったんだということは大変大事なことだったというふうに思っております。そういうような話ができる場として、こういう審議会というのは大変意義があることだというように思っています。

さて、私はこのビジョンの中で期待しているのは、我々、学校の現場にいますが、それぞれ学校のその目標の達成に向かってがんばっているわけですけれども。それは当然のことだと思いますが、それを後押ししていくような形が欲しいなということをつくづく思います。先ほどのコミュニティスクールっていうのもその一つなんですけれども。あんまりマイナスなことは言いたくないんですけれども、国の教育改革の懇談会なんかから出てきたものが一体何だったかと考えると、それが例えば免許更新制であったりですね、あるいは携帯電話の話だったり、どちらかっていうと、先生や生徒たちのマイナスのところの話を是正するような議論が出てきてしまっていることは残念だと思います。ぜひ、三重県のこのビジョンは、生徒が元気になり、先生が元気になるという、そんなビジョンにしていきたいなというふうに考えて、そういうつもりで発言をこれからしていきたいなというふうに思います。以上です。

（委　員）

どちらかというと高校生の保護者の立場ということで、いろいろお話等、意見等もしたいんですけど、実際、高校生の保護者が、どんだけお子さんに関心、教育に関心あるか。進学校の保護者の方は、やはり上の大学に行くっていうことで、かなり子どもさんの教育に関して一生懸命やっている。現場の先生も特色のある学校を目指して、いろんなことやっているっていうのは本当によく分かるんです。

その中でも、専門学科に通っているお子さんを持っている保護者の皆さんの意見を聞きますとですね、「なっとか卒業したら就職できるやろ」と、全員が全員じゃないんですけど、安易な気持ちの方がかなりいますね。「この学校へ行けば就職率いいから大丈夫だ」というような安易な感覚で、いろいろ話は聞いとるんですけど。そういうのが教育のこと、皆が考えやないかんこと、大事なことを本当に忘れてしまっていることにならないかと思います。

ここには５つの重点目標って書いてありますけど、僕の中で１つ、やはり「生きる力」っていうことを教育の中に取り入れていくことが大事だと思うんですよね。やっぱり「生きる力」がないと、これはちょっと語弊があるか分からんと思うんですけど、やはり社会に負けてくような子どもさんもみえると思うんですよね。やはりそういう人として基本的なことをもっと教育の中に取り入れていきたいなというような気持ちがあります。

それと、三重県で教育を受けて、専門学科を卒業して、地元の企業に残って、地元に就職できて、三重県で残ってよかったと言えるようにすることが必要ではないかと思います。自分の子どもも県外へ出さずにちゃんと生活できるようにしていきたいというような環境づくり、教育づくり、そういうことも考えていかないかんかなっていうことを思います。それと、僕も高校総合文化祭の関係で紀南高校のほうへ仕事の関係でお邪魔したことがあったんですね。そこの先生ともお話さしていただいた中で、やはり過疎地ということで限られた学校しかない。尾鷲、木本、紀南高校、後はもう隣の和歌山の新宮へ行く、それと近大高専、その選択しかないんやっていうことを言われていました。それで本当に十分な教育ができればいいんですけど、津市の奥のほうの白山、美杉とかあの辺もかなり町へ出てくるのに時間かかるんですね。やはり、保護者の経済状況により、いい学校にやらしたいんやけど、どうしても行けない。そのためにはどうしたらいいかっていう問題がある。勉強はできてもですね、私学とかそういうとこへ行くにはなかなか経済的に余裕がないっていうことで、辛抱して地元の県立高校へ行かそうかっていう方、本当に何人かみえるそうです。そういう中で、やっぱり十分な教育ができるようなカリキュラム等、新しい教育の内容を考えていただくと、本当に助かると思いますので、また、いろいろこれから僕も勉強しますので、なにとぞよろしくお願いします。

（委　員）

民間からこの教育の世界に来てまだ間もないものですから、率直に感じた、学生と接していて感じたこともお伝えしたいなと思っております。前職におりましたころからもですね、県内の４年制と短期大学のほうで非常勤でずっと５、６年やってはおったんですが、やはり非常勤ではなく、ゼミの生徒も持ち、やっていたときにまず思ったのが、自分たちが高校生あるいは大学の時に接していた先生との距離感っていうのが全く違うというふうに非常に驚かされました。以前は先生のリーダーシップ力がというご意見もありましたけれども、本当に自分の子どもとの距離感のような雰囲気で、先生との距離感を学生も求めてきております。それが負担になるというぐらい親身になって日々、授業だけではなくて生活面からサポートをしている時間に日々追われているというのが、まず一番ギャップといいますか、自分自身がこの世界に入る前に思っていることとのギャップです。そういうことを高校の先生などにもお話をしておりますと、随分とやはり学生さんとの距離感というのも違うということで、それが悩みになっているというふうなこともお伺いもいたしますので、教育の現場にみえない方もみえますので、お伝えしたいなというふうに思いました。

その中で、今後あるべき姿を考えますと、どうしても少子化になり、当然労働力っていうのが減ってくるわけですから、これからの学生の１人ずつのその潜在力とか、効率性っていうのを上げていかなければ、どうしても地域や経済的なことの発展はないわけです。そういった意味で、学力もそうですし、プラスアルファの能力というものが、とても教育現場で求められてきているのではないかなと非常に思います。

その中で思うのが、そのプラスアルファの能力というものも、残念ながら今の高校生や短大生、少なくなってきている割合が多いのではないかなということです。その力が、じゃ、どういうことなのかというと、もちろん学力がなければ、プラスアルファっていうのもない。あるのかもし

れませんが、例えば、よく言われることでは、想像力とか、企画力であったりとか、成し遂げる力であったりとか、そういったものが非常に少ないと感じています。自立性も少ないのではないかなと思います。何か一つ壁が出てきたりとか、難しそうだな、面倒臭そうだなって思ったりすると、みんなほったらかしなんですよね。それを指導したり、道しるべをつけたりしないと、やらずに終ってしまうっていうのがすごく多いんかなっていうのを感じました。それなぜかなって思ったときに、大学の入試にも、私たちの時代にはなかった、例えば、ＡＯ入試があったりっていうこともあって、壁を乗り越える辛さであったりとか、乗り越えたときの達成感であったりとか、あるいは達成しなかっても、そこで一度挫折感を感じたりとか、そういうことが人間として、先ほどの「生きる力」にもなるのかもしれませんが、人を強くしているところっていうのがあったのではないかなっというふうに思うんですね。ですが、傷つくことがすごく怖いので、はじめからその壁を乗り越えない、乗り越えなくても、今の教育の現場や社会の構成が、生きていける逃げ道みたいなものを用意しているので、どうしてもそちらのほうに行ってしまうという割合が増えてきていて、学力以外のプラスアルファの力というものが伸びない状況に陥っているのではないかなというふうに、本当に短い教育現場で、大変間違ったことを言っているかもしれませんが、私はそういうふうに非常に感じている次第です。

ということとですね、後ちょっと別件なんですが、地域あるいは産業構造にあって、やはり学力をっていうところも必要かと思うんですが、そういった意味で今の学生を見ていて思うのが、体験をしている回数がすごく少ないということです。些細なことで言うと、例えば、電車に乗って名古屋へ自分で行ったことがないという子もいるんです、大学生でも。とか、田植えをしている現場を見たことがないとかですね。かまぼこっていうものが魚からできていることも知らないとかですね。本当に生活に関する知識、それから、覚える体験っていうのがすごくないですよね。そういったことから、その地元であったり企業であったりっていう方々とコラボレーションをしながら、体験をしてそれを学習に取り込んでいくっていうことは、これからもっと必要になるのではないかなと思っています。そういった意味で、県のいろんな高校で、例えば、一つスーパーサイエンスの授業なども取り組まれていますが、あれもやはり一つのコラボレーション力といいますか、独創力、発想力っていうのもすごく発揮できているのではないかなというふうに感じていますので、やはりそういったいろんな大学や研究機関や地域や産業とコラボレーションしながら、何か一つ形を残していくためのプロセスを体験させるというふうなことをこの教育のビジョンの中で謳うことができたらなというふうに感じています。

（委　員）

先ほどから、私どもの小さな学校、紀南高校の話題をいただきましてありがとうございます。

私もここ10数年余り、単位ＰＴＡに始まりまして、郡Ｐとか市Ｐとか、また、県のＰＴＡ関係でも副会長をさしていただいことがあるんですけれども、紀南高校の学校運営協議会のほうも会長をさせてもらっているということで、いろんなことで県の教育に関しては体験といいますか、実際携わってきました。その中で、当初は文科省のほうで週５日制とか、また、ゆとり教育とかいう中で、本当にいろんな勉強っていうか伝達係りといいますか、そういったことをさせられて、バタバタバタバタした思いがあります。結果が今のような学力低下につながってしまったっていうことで、一体、何しとったんやろっていうこともあります。多分国のほうでも同じような会議があって、国の指針なり目標を持ってよかれと思ってやっていることで、先ほども言われた人もおったんですけれども、なかなかそれが伝わっていないっていうところで問題が生じてきたような気がします。

というのも、やはり東京で考えていること、離島で考えていること、また、三重県においても北勢で考えることと、我々この地方で考えること全く違うんですよね。だから、こういった会議の中でもやっぱり地域性を重視して、いろいろ考えてもらわないと、天下を統一していろいろ考えるっていうのは、なかなか難しいんじゃないかなっていうふうに思っています。

県教委を褒めるっていうか、ちょっとお礼にも当たるんですけれども、三重県は、高校の再編活性化っていうことでも、本当に地元のことをよく聞いて、その意見を反映してくれたなっていうところを感謝しているんです。

私のところは和歌山県との県境ですが、向こう側は県教委が考えたことは、もうトップダウンで、もう「来年からこうしますよ」っていうような形で、地元の意見をあまり聞かずに押し通すっていうような形で、後で不満を言っている人もかなり多いと聞きます。三重県の方は、きちっと話を聞いてくれたということをすごくありがたかったなというふうに思っています。そのお陰で第二次の再編活性化の中で、紀南高校をどうするかということで、本当に木本高校に統合され

てもおかしくないなという中で、残すことができました。他の地域と違って、何でよかったかということは、地元の人のどうしても残したいという強い意志と、木本、紀南両校の保護者も２校を選択することが必要やっていう意志も大事でしたけれども、Ｐ連のほうの働きかけというのがすごく大きかったと思うんですよ。やっぱりそこで地元の保護者に対して、残すなら早く運動しようよと呼びかけて、県教委に対しても何度も働きかけをずっと行なってきたということもあったと思うんです。結果的にすごく学校も良くなりましたし、自信を持って進めてく学校になったと思うんです。ただ、今は普通の学校になっただけで、気を抜けば、もう直ぐにでもおかしくなっても仕方ないなというふうにも、危機感も持ってやってこうということでがんばっています。

それと、今度はちょっと話が違うんですけれども、この資料を見ていて一番気になったことなんですけれども、この県の教員の構成というグラフを見たときに、45 歳ぐらいから 50 代という年齢層がかなり多いと思うんですけれども、逆に 20 代っていうのが本当に少なくなってしまって、この先、教員のバランスというのがどういうふうになってしまうんかなと思いました。かなり危機感も持っとかんと、いけないのではないか。特に高校がひどいんですけれども、多い時で 400 人余りだったところが、今では 15 人ぐらいしかないとか、こういう差があっていいのかなというふうに思うんです。ちょっとそこら辺も将来のこと考えて、もう少しバランスをよくしてもらえたらなというふうに思います。以上です。

（会　長）

ありがとうございます。今、大体３時 10 分ぐらいですので、10 分ほど休憩をさせていただきます。したがいまして、再開は３時 20 分ぐらいにさせていただきたいと思います。それでは、休憩をよろしくお願いをいたします。

（15 時 10 分休憩）
（15 時 20 分再開）

（会　長）

再開をさせていただきます。ご発言、大体お 1 人３分程度ということで、よろしくお願いします。

そして、今日は閉会 16 時 30 分を予定しているのですが、もしかしたら少し延びるかもしれません。ご協力をお願いしたいと思います。

（委　員）

今日、ここに置いていただいたこと、本当に感謝いたします。「私も表千家をしています」という中津校長先生や浜辺さんにもお会いできたこと、本当にありがたく思います。

私自身がここにおらせていただくというのは、お茶の面もあろうかと思いますけれども、一人の母親として、そして、自分が今までやってきたことがお話できたらと思い、お話させていただくんですけれども、平成３年４年と、今は連合会になっていますけど、三重県ＰＴＡ連絡協議会のときに理事をさせていただいて、そのときにちょうど５日制導入のことが話し合われたんです。その時には、子どもたちを家庭に戻そうというスローガンの下に、国も三重県も、そして親もいろいろ話し合われたんですけれども、その結果、５日制が導入されて、今のとおりになっている。その子たちが今、母親や父親になっている。皆さんのお話を聞きながら、私たちがやってきたことって良かったんかなと一つ思いました。

というのは、これは一部かも分かりませんけれども、自分たちの子どもをわざわざ保育所、そして、また違うところに預けてまで、自分たちがパッとしたい、遊びたいがためにどこかに行っている、それが本当のゆとりなのかな、そう今考えさせられて、私たちがやってきたことが良かったんかなと思いました。そう思いますと、先ほどもおっしゃられたように、やはりしっかりと先を見据えることが本当に大事なんやなと、私ここでは思いました。地域を大事にするのも当然なんですけれども、地域の声にあまりにも流され過ぎてもいけないということを、私自身思っております。

これは小さな小さなことですけれども、鳥羽は過疎化のところが多いです。離島も多いです。その中で、去年４人の子どもが入学する予定だったんですが、結局、１人の子が入学して、後の３人の子は町の学校へ行った。ということは、結局、その１人の子のために学校というものが一つまた速度を落とし、元気をなくしてしまうという結果になっていたと思うんです。

今年はどうなるか分かりませんけれども、そういうことも考えれば、やはりその学校、市町の教育委員会そのものが、それでは学校が成り立たない、子どもたちを育てていけないということをはっきりと言っていただけるような、ポリシーを持っていただきたいし、また三重県も、そこ

はちょっとおかしいんと違いますかという意見も言っていただきたいなと私は思います。

それと、やはりそういうふうになっていくというのは、家庭の教育力、地域の教育力、これがやはり中途半端に終わっていってしまったなという気持ちが、私自身ものすごくしています。自分が今、子どもたちに接している中で、子どもたちはものすごく素直です。そして、お茶を教えるときに、「このようにしなさい」、「ご挨拶しなさい」と言うそのとおりにします。そして、「お家に帰ったらこのようにご挨拶したら、お父さんお母さん、褒めてくれるよ」と言うと、今度来て「褒めてもろた」と言うて来ます。子どもたちはすごくいいんですけれども、やはりそれを受け止める、それをこれからどうやって育てていくかという家庭がやはり一番問題かなと私は自身思います。ですので、ここが家庭の話をする場ではないか分かりませんけれども、結局このビジョンを使っていく人は、やはり家庭から育っていく子どもたちであり、大人であるということを見据えて、これから話し合っていただきたいなというのが私の気持です。

（委　員）

私は小学校の校医を致しておりますが、その中の一つの学校は山、川など自然に恵まれた田舎の学校です。子どもたちは自然の中で遊び、生き生き伸び伸びしているように感じられますし、また保護者の方がよく学校におみえになると伺っております。都会ではこのような自然な環境に接することが少なくなっているように感じられますので、自然の中で遊ぶ、学ぶような体験を教育の中で取り入れて頂ければと思っております。先ほど委員の方からお話を聞かせていただき、今思ったことをはじめに述べさせていただきました。

さて、私はある会社の産業医をしています。子どもが大人になってその後どのように成長していっているのだろうかということに興味を感じたからです。私の産業医業務の一つに、悩み相談やうつ病の職場復帰支援があります。悩みやうつ病の要因にはいろいろな原因がありますので一概には言えませんが、そこで感じることは、もともと自己肯定感が低い、自分の意見や本音を上手に出せない、人とのコミュニケーションが上手にとれない、そういった方が非常に多いのに気付かされます。また、「あなたの得意なことや趣味はどんなことですか」とお訊ねすると、得意なことや趣味をもっておられない方が多いのにも気付かされます。

自己肯定感、自分の意見や本音を出すこと、良好なコミュニケーション、得意なものを持つ、といったことは、自分の人生に大きく影響を与えかねないほど大切なことだと実感致しております。従って学校教育を通じて、生徒一人ひとりをそういった観点から、学年を超えて見つめ続けて欲しいと思います。是非義務教育時代に、その礎を培っていただきたいものと思います。

メディア漬けの問題が大変深刻になってきています。学校では規制されているかと思いますが、メディア漬けにならないように、子どもがどのように主体性を持って対応していけるかを、学校、家庭が協力、連携して支援していく体制づくりが今後必要かと考えます。

障がい者教育については、障がいある子もない子も人はみんな同じだ、人みな兄弟という思いで支援していきたいと思っています。可能な限り能力が発揮できるように教育が受けられる体制、自立して働けるように訓練できる体制、さらに企業に多くの障がい者が受け入れられるような企業側の努力と仕組みが、必要ではないでしょうか。是非三重県では、他県よりも多くの障がい者が企業で働くことができるようになっていくことを願っております。

最後に、学校教育が充実したものになっていくには、家庭教育の向上、そして学校と家庭の協力が欠かすことのできないものと思います。

（委　員）

私もいろいろなことは考えさせられますし、ここで伺っていて、そうだそうだと思うこともたくさんございます。この教育振興ビジョンということなんですが、ビジョンというからには、やはり今ももちろん、現在の状態を知ってのことなんですけれども、もっと遠くへ目を向けないといけないんじゃないかなと思います。ということは、10 年後、あるいは 20 年後、今の中学生、高校生が 10 年経ったら、どんな大人になってほしいのか、どんな人間に育てておかなきゃいけないのかと、そういうことを考えていかないと、大きなビジョンができないんじゃないかなというふうに思いますし、方向転換も難しいかなというふうに思います。

ビジョンをつくるときに、私たちがその後の子どもたちに何をしてあげられるのかということを考えるときに、いい教育とは何なのかということをもう一度問い直してみる必要があるんじゃないかなというふうに思います。今、世間の価値観は偏差値がいくらで、どこの大学に何人入ったかとかいうような、そういうことが非常に大きな、これは生徒だけじゃなくって、保護者の価値観ということは社会の価値観でもあるわけです。本当にビジョンを立てたときに、やはりこう

いう価値観で縛られていたのでは、何も動かないなというふうに思います。

先ほどからいろんな方が自立した人間ということをおっしゃっていますし、うちの学校の教育の今の目標もそうです。本当にそれは私も賛成するところなんですが、特に最近、精神の低年齢化ということが言われているわけですから、なおさら私たちはこのことを考えないと、大人になれてない大人をつくり出してしまうわけで、家庭教育も同じだと思うんです。母親になれてない母親が子どもを教育しているという現状があるかと思います。そういう意味で、もちろん必要な学力をつけて、学力アップに励まないといけないと思うんですが、今、子どもたちを見ると、直ぐに答えを欲しがります。「答え間違ってもいいから、自分で考えなさい」と言うと、考えられないんですね。もう「正しい答えは何」と、これを即求めてきます。ていうのは、塾に行ってそういう教育を受けているんですね。こういう現状もこれからのビジョンを考えるときに、何か考えていかないといけないことじゃないかなと思います。そうしないと、創造力も考える力も、それから、新しいことに気づいていく力も生まれないわけですし、社会はどんどんグローバル化が進んでいるわけです。若い人もいろんな国に出て行きますし、外国からも入ってきます。私どもの学校でも留学生を受け入れると、いつも留学生に私は月一度ぐらいの面接をします。すると、留学生が言うことは、「どうして日本の学生はファッションとかスターの話ばっかりで、今、この日本の社会で起こっている問題の話題がないの」って、うちの学校だけなのかも分かりませんけど、もうこう言われて恥ずかしい思いがするわけです。だから、「話題がおもしろくない」と、こう言うわけですね。

これが留学した生徒が今度は帰ってきて、「何がよかった」と聞くと、「あちらの学校ではどんどん自分で考えて、いろんなことに意見を言わなきゃいけないから、自分の考えを持つことができるようになった」というふうに言いますし、そういうことをもっと狙っていかないと、これからのグローバル化の中で、日本人はなかなか前に立っていくことができないんじゃないかなというふうにも思います。

私は修道会の会員なんですが、１人のアメリカ人のシスターがうちの学校で教えておりまして、中国の大学から派遣を要請されて、中国で５年ぐらい教えて、今、アメリカに帰っているんですが、そのシスターが言ったことは、「中国人は日本人よりずっと英語を短い期間しか習ってないのに、すごくうまい」。英語だけじゃなくって、やはり今さっきいいましたように、「いろんなことを議論できる。日本の生徒とあんな議論をしたことがない」ということを言っておりましたけれども、そういうようなことも私は感じております。ビジョンをつくるときに、やはり土地柄もものすごく大事ですが、この土地でこんなにいい教育がなされているということを打ち出していけるようなビジョンを作れたらいいなというふうに思うんですね。

それと、もう１点は、先ほどからも出ています家庭教育ですが、これ絶対必要だと思います。三重県だけでないかもしれませんけど、私は今度、高校総合文化祭でいろんな学校の先生といろんなお話を交わしてきまして、三重県に公立の女子高がないと聞かれてびっくりされた先生、何人もありました。三重県は今、私立で２校しか女子高がないんですね。21 世紀は女子の時代と言われております。こんな家庭教育や、あるいはいろんな点で女子が進出していくのにキャリア教育が必要なときに、三重県に公の女子教育がないというのもどうなのかなというふうにも思います。女子高というのは、今、生徒募集のものすごく難しい時代です。でも、あえて女子教育をしているのは、やはり女子教育の重要さ、必要性というものをすごく感じているからです。というようないろいろまとまらない意見でしたが、以上でございます。

（委　員）

前もってデータをいただいたので、現状認識項目データを、目を通させてもらって、とってもいろんなことを学ばせていただきました。この中で気づいたのは、19 ページですか、子どもたちの現状で、学力は全国調査すると 67％ぐらい、なんか算数なんて 50％ぐらいですか、正解率高くないんですよね。これはよしとするか、ありとするかは別にしてこうなんだと。でも、三重県は全国平均にそんなに離れてないから、よしと思ってみえるのかな、とちょっと私も疑問だったので、これはここで置いといて、じゃ、子どもたちはどうしているんだろうと見ると、子どもたち結構勉強しているんですよ。普段の学校のあるときに、５割以上の子どもたちが 1 時間以上勉強しているんですよね。中学になると、もっと勉強しているんです。子どもに１時間勉強させようと家庭で思ったら難しいですよね。塾に行けば簡単ですけれどもっと勉強している子がいるんです。

それから、今度 21 ページを見てもらいましたら、１日当たりのビデオやテレビ、ＤＶＤを見て

る時間、これはゲームも入っているんかなと思うんですけど、３割以上の子どもたちが３時間以上やっているんですね。睡眠時間は短くなるんです。24 時間考えると、これはきっと勉強すればするほど、時間がなくて睡眠時間を削って、ゲームとかビデオを見ているんじゃないかなと思ったんです。勉強ばっかりしてゲームやらない子はいないと思うし、率からしてもやっぱりそうなっているんですよね。中学生では睡眠時間６時間未満の生徒が 1 割近くいますが、中学生がこのぐらいというのはちょっと脳の機能からしてもあかんと思うんですね。

それから、もう１つびっくりしたのは、25 ページで、自分には良いところがあると思うかというところで、小学校から中学に向けて減るんですね。４割の子どもたちが中学になると、「自分には良いところがどちらかといえばないと思う」、「ない」と答えています。中学校の思春期の一番大事なところで、自分にはいいところがないと思い切ってしまう子がこんなにいるのは、私はとっても悲惨だと思うんですね。小学校は低学年も含めるから、このぐらいかな、もうちょっといると思うんです。ちょうど一番思春期の大切なときというのは、夢を持つ前に自分の中のいいところと悪いところと、得手不得手を意識するようになる。その時、みんなが成績がいいからいいと思うんじゃなくて、勉強ができる、それもあるでしょうけど、剣玉ができるでもいいし、運動がいいんでもいいし、趣味なんかでも、性格も仲間から「お前いいやつやな」と、「おもろいやつやな」と言われただけでも、それは自分の良いところになるはずなんですよね。

そこで、今度は自分はこれで勝負をしようと思っていくんだと思うんです。高校になって自分の将来の職業を選ぶときに、自分はこういう得意なとこ、みんなからいいと思われたところがあるから、ここでやってこう、これを活かせる仕事、夢があればというふうに思っていくのが子どもたちだと思うんですね。ここで中学校のときにこんな４割の子が、自分にはいいところがないと思うといった結果を、大人はやっぱり深刻に受け止めなきゃいけないと思うんですよ。子どもたちが自分にいいとこがないと思うのは、大人から評価されたから、そう思うんです。特に小さければ小さいほど、大人が評価すれば、直ぐ自分はこんないいとこがあると思って自信を持ってやってくわけです。すると、学校時代の子どもたちが誰に評価されるかというと、親か先生なんです。12 年間、子どもたちはたくさんの大人に会うのは、学校しかほとんどないですね。塾の中は教えてもらうだけのことになります。だから、いろんな個性を持ったいろんな先生たちがいることが大切なんですけど、私は 35 年間、すごく弱い、何かの問題を持った子どもたちとお付き合いすると、必ず先生たちともお付き合いしてきました。そうすると、先生たちで何が変わったかというと、先生たち工夫ができなくなった。「子どもはこんな特徴を持っていて、こんなふうに教えたら子どもは治る」。それから、「こんな性格があるけれども、それを良くするにはこういうふうにしたらいい」というふうにちょっとアドバイスをさしてもらうと、昔、20 年ぐらい前は、先生たちが「ああそうか」と思ったら、今度、教師としてのプロの知識を駆使して、子どもに分かる勉強、この子が分かるように教えることを工夫されていました。そういう先生に本当に会わなくなったですね。

算数の学習障がいの子どもさんに、「この子は学習障害で算数の障害がある、順序の障害がある、こういうふうに脳の認知はそうですよ」と教えると、本当はそれを「ああそうか」と思ったら、特殊教育の本を見たらどうすれば良いか書いてあるんですよね。ところが調べられません。その次に、今は例えば「1＋１を教えましたけど、次は何を教えたらいいんですか」、「数え方どうしたらいいんですか」、私に聞くんですよね。私先生じゃないんですけどね。そんなふうになんか自分で工夫して時間をかけてなんとか達成する力が、先生にもないんだと思います。即、答えを要求されますね。暴力を振るう子、切れる子を即おとなしくする方法を先生は聞いてくださるんですけど、子どもの切れる裏の心理を伝えて、その子のその欲求不満、評価をどうしたらいいかって先生が工夫してくださる先生に会うと、子どもはとっても生き生きしてきます。毎日の関わりの中で、例えば、学校にいる長い時間の中で、先生がしっかりその子を見て関われるようになったら、子どもはすごく変わるんですよね。その力が先生にないとすると、先生をどういうふうに教育するか。先生の教育の力をどうするかが問題です。

今、さっき竹下教育委員長さんが言われたことスコンと入ったんですよ。何で先生たちが画一的に教えるのかなとか、先生はなぜ工夫しないのかなとか。目の前にいる子に算数の教え方っていろいろあって、先生が自分の生活に基づいてしたらいいんじゃないかなと思う。それが大事ですね。そういう現状がある。

それから、親御さんもそうですけれども、子どもたちが思春期になって大体親に反発するときは、大人の生き様を見るんですね。言っていることとやっていることの違いがあって、これは今、

家庭力をおっしゃいましたけど、やっぱりその子どもが大人になったらどうなるかというと、10年後 20 年後に結果が出ることなんですよ。今の世の中というのは、効果効率を要求されていて、私、県の方針もあまり好きじゃないんですけど、やっぱりいろんな施策を考えて、プラン・ドゥー・シーで、結果が分かるように説明せいと言うんですね。とすると医療とか教育というの、結果が分かるたって 10 年後 20 年後で、個人がどういうふうに生きてくかをどうやって評価するんだと思います。そもそも何でも一律に画一にマニュアルどおりにというのがちょっとおかしいんじゃないかなと思う。そういう教育のところ、本当に人を育てることは、やっぱりとっても大切なんだというふうにやらないといけないと思いますね。

私は団塊の世代に生まれたので、父親たちから戦後に「一生懸命して勉強していい大学に入って、なんか技術を身に付けたらいいことがある」って教えてもらった。「末は大臣か」ってあったんですけど、自分の仲間は競争してずっとやっていたんですけど、なんか 10 年 20 年 30 年の後を見ると、本当にそれが幸せなのかなと思いましたね。一生懸命働いて給料をたくさんもらっていても、ほとんど仕事にとられて、なんか妻からはぬれ落ち葉にされるし、子どもからは「お父ちゃんみたいにがんばったってこの程度」みたいに、そんなふうに家庭の中で思われたらどうなんだろうと思うんです。高学歴だから、高収入だから家庭が幸せだはと思いませんね。

私、最後に思うのは、やっぱり人の和だと思うんですよ。弱い人を支える、自分が弱くなったときに、誰かに支えてもらった体験をすれば、一人じゃないんだということがよく分かるんだと思うんですね。都会と自然の違いは、時々都会に行くんですけど、「そうか、ここはお金があれば、全部直ぐ満足できる」。危険もそうですね。でも、自然の中に入ったら、お金って何にも意味がなくて、結局、誰か隣りに人がいてくれるのが一番安全で、そんなふうに思ったりもします。

子どもたちは現場の先生たちがそういうふうにチームを組んで自分に対応してくれるという体験がとっても大切で、この前いい体験をしたんです。普通学級で教えられない先生を担任にせざるを得ない状況があった。普通だったら、親が文句を言って先生を担任から外すんですけど、そこの学校のいいところは、校長先生がその先生に担任になってもらったら、優秀な学年主任をつけて、チームでその教室の子どもたちが 1 年間戸惑わないようにサポートしようと決めたところです。実際には 1 人のとても困った子どもが、そのクラスの中でいじめにあって、先生がサポートできなくてダウンしたんですけど、養護の先生、学年主任の先生、スクールカウンセラー、校長先生、ちゃんとサポートして 1 年その子を育て上げたんですね。そのチームで子どもは思いがけずすごい成長をしたんです。その先生は、他の先生たちみんながいろいろ役割を分担するから、口を出さずに黙って見守る役割というので付けられたんです。大人がだめな人は直ぐ排除するような組織は、子どもたちはそれを見て、「あっ、弱いやつは助けてもらえないんだな」というのを学習していたんだと思うんですね。だから、やっぱり学校の中にそれぞれの人が、弱くてもなんでもやっていける、チームとしてやっていける組織があるほうが安全かなと最近は思うんですね。そういう意味で、学校の組織のサポートの仕方もやっぱりみんなが考えなきゃいけないことかな。1 人の個人の先生を責めるのは簡単ですものね。そういうふうに今、思っています。

（委　員）

今、夏休み真っ最中ですので、モクモク手づくりファームには夏休みの子どもたちのための食育のカリキュラムがたくさんあります。１週間ほど預かるカリキュラムがあったり、親子で２泊３日の田舎体験だったり、お野菜を自分で採って自分でお料理したりというような自然の中の発見だったりで子どもたちが大きく育っています。食育っていうと、じゃあ何なの、どんな教え方をするのっていう中で、教えていると、ものすごくショッキングなことに出くわすんですね。小学校６年生の子どもがファームにいる茶色のジャージー牛を見て、「ジャージー牛は茶色いからコーヒー牛乳を出すんですか」って質問を真顔でするんですね。

今日、山田先生がいらっしゃるんで言いにくいんですが、三重大の学生さんが「ハムとウインナソーセージは豚が原料なんですか」って質問されたりするんですね。勉強はできても何かちょっと食生活だったりとかがずれていたり、当たり前のことが少しずれていたりします。

今日、教育委員会の先生もいっぱいいらっしゃるんで言いにくいんですけれども、教育委員会の先生方がモクモクファームに食育の下見に来られて、牛さんの乳絞りの授業のときに皆さんにする質問をその先生にもしてみたんです。まず、どんな牛が乳を出しますでしょうかという質問で、４枠で答えていただきます。男の子と女の子、両方乳牛といわれている牛は、誰でも牛さんの乳が出るんだよという答えと、女の子では全員出しますよ。そして、大人になって妊娠している牛はお乳が出ますよ。あと１つ、お母さん牛になって子どもを産んだらお乳が出ますよという、４つの答

えが用意されていて、きれいに４分割に答えが返ってきます。やっぱり当たり前で考えると人間と同じなので、赤ちゃんを生んだお母さん牛しかお乳は出ないんだけれども、大人であっても子どもであっても、そういったことはやっぱり学ぶ機会がないんですね。そんなこと知らなくても全然いいよっていうこともあるかもしれないんですが、学校教育では見つけられない食育っていうのは、やっぱり必要なのかなと思っておりまして、今、愛情が生まれたりとか、地域の関わりを持つことで郷土愛までつながったりするんではないかと私は思っています。お願いいたします。

（委　員）

先ほど、食のお話がありましたけど、やっぱり生産現場と消費現場が離れ出しましたので、なかなか実体験として持ちにくいというのがあろうかなと思います。工業製品でも昔はアナログでしたから直せたんですけど、今はデジタルですから直せませんよね。中のメカニズムは難しいことになりますので。子どもたちにそういう生活力といいますか、そんなん教えにくい世の中になってきているなと思います。

それと、やっぱり夢を持てるビジョンといいますか、戦前の方は、わが子は自分たちよりも豊かになると信じてみえたと思います。我々高度成長期ですから、まだまだ未来は豊かになろうという絵を見せられながら育ちました。

ですけど、今の子どもたちは果たしてどうかということですね。ですから、そういう意味である程度の夢が持てるといいますか、自己肯定感を持てるような教育が一つテーマで取り上げていただけるとありがたいなと思ったりします。

それと、もう１つ、アメリカのハーバードを上がった人がウォール街に行ってマネー資本主義に走られて、今、崩壊になりましたけど、やはりその中で「公共性」のある公益資本主義のようなものが次に来るべきであろうというようなことを、ＮＨＫでもやってみえました。その「公共性」というのをどこで学ばせるか。やっぱりこれは地元の有志の方が実体験を学校で話されるのか、やはり親がお金だけじゃないよと言い続けるのか、それは分からないんですけれども。やはりそういうどこかで「公共性」を身に着けていただけるとありがたいなというのが、行政から見ますとお願いしたいところです。どこのお店やさんでもそうですが、クレーマーと言われる方が増えています。不況、好況関係なく権利意識が増えていますので、ちょっとしたことでクレームになりトラブルになる。そして裁判沙汰になるという世の中になりつつあるのかなと思っております。マスコミの影響も大きいかな思うんですけれども。ですから、そういう意味で「公共性」をお願いできたらなと思います。

それと、貧困層が増えております。これは日本の社会として統計上も表れております。生活保護家庭、準保護家庭が増えておりますので、教育現場でも先生方、相当苦労をされておられます。例えば、母子家庭でお母さんがパートタイム労働で借家ですと、200 数十万しか所得がないと破綻をします。その母親がうつになっておられる家庭もあるんですよね。そうしますと、食事も出てこない。だから、保母さんとか幼児教育の現場で給食をあえて残しておいて、その子のためにそっと出して、それが夕食になるわけですね。その栄養で餓死を防いでいるわけですよ。そういう家庭も見ます。貧困の世代を超えた固定化をいかに防止するか。要は生きるために、そういう「貧困で生まれたがために、もう一度貧困を繰り返す」、こういうことのない社会にはどういうふうにしていったらいいのかというのが、今後の日本の課題かなと思ったりもします。

最後ですけど、地域の教育力って皆さんおっしゃっておられました。本当に地域が支えなきゃいけないと思いますし、そういう地域の教育が低下してきたために、学校現場の教員の方の負担が大きくなっておられるのかなと思います。その中で、文部科学省から、一つ総合型地域スポーツクラブ、ヨーロッパ型のスポーツクラブですよね、そういったものをすべての市町村に造りなさいと言われています。その地域ですべての種目の何らかのスポーツができるような、そして、レベルも素人から玄人まで、年齢も子どもから高齢者までできるようなものです。ヨーロッパのチームをご想像いただきますと、プロもありまして、プロを地域の皆さんがサポーターとして支え、そして、そのプロの方もときには教育指導のほうに回る。そういったお互いが支えあうようなスポーツクラブを想定しているわけですけど、日本ではなかなか育ちにくい。これはどうしてか。私個人的な意見としては、皆さんスポーツといいますと、学校の間は一生懸命やるわけですけど、社会に出た途端に止まるんですよね。それを社会体育の中で普及してこうというときに、一つ大きな問題があるのは、中学校の体育連盟、高校の体育連盟そういったものが、「大会は中学校じゃないとだめよ」とか、「高校は高体連に所属してないと、大会には参加させない」とか、その壁がありますので、要は過疎化した高校とか中学が隣の中学と連合チーム作って参加しようか

と言ったって、無理なんですよね。クラブ活動の重要性をどなたかおっしゃっとりましたけど、クラブ活動も顧問の先生の負担が多くなってどんどん止まっています。ですから、そういった意味で、もう少し抜本的に変えて、社会としてスポーツに参加しましょうというような方向にある程度切り替えていかないと、規模の大きい中学校、高校が常に勝つ。規模の小さい小学校、中学校、高校が常に負けるという、勝負が完全に見えているような、そういった世界になろうかなと思っておりますので、一つご考慮いただけるとありがたいなと感じます。以上です。

（委　員）

今、学校教育、家庭教育が非常にいろんな問題を抱えているということなんですけれども、私ども企業にとりましても、社員教育というのが非常に重要な課題でありまして、どこの企業も真剣に取り組んでいるんですね。私どもも大体毎年 20 名ぐらいの新卒の学生さんを採用させていただいているんですけれども、その社員さんを何とか 1 年後も辞めずにきちっと育てられるかというか、これが非常に今、課題になっておりまして、大体、２割ぐらいの人が１年ぐらいの間に退職してしまうわけなんですね。

その中で、やる気のある社員さんをきちっと戦力化でできる社員、人材にどうして育てていくかということは、企業の命題でもあるというふうに考えております。今の学生さんは一般的に見ておりますと、なんか難しいこととか困難なことに直面すると、もう直ぐそこから逃げてしまって、それを追求してくと、結果として、じゃ、もう会社辞めますということになってしまうですとか、あとは自分のキャパシティはもうここまでであって、それ以上のことを指示を出すと、もう「自分は今、とてもそれはできない」というふうに、自分の事を最初から決めてしまっている人が結構多いように思うんですね。それ非常にもったいないと思うんですね。人間の可能性って、すごい無限にありまして、まして 20 代そこそこの人たちって、ものすごい可能性も秘めていると思うんです。私どもの企業としましては、そういう人たちが持っている潜在的な能力に光を当てて引き出してあげることが、私たち、まして社長の役割であるというふうに考えておりまして、いろんなあの手この手を使って社内で教育を今、行なっております。ですけれども、よしやるぞっていって燃えるチームを作るってなりますと、非常に難しいんですね。それがどうしてかなといいますと、やはりずっとその人が育ってきた 20 年間の家庭にやっぱり原因があるんじゃないかなと思うんですね。

よく「三つ子の魂百まで」って、昔から言われますけれども、私は本当に３歳までの間にいかにたくさんの愛情をもらっているかが、その人の脳の成長過程において、非常に大きな意味を持つんではないかなというふうに思うんですね。それが今の社会を見ておりますと、お母さんも働きに出ていて、非常に忙しくてなかなか子どもにかまっていられないという状況の中で、本当に十分な愛情を注いでもらって、３歳までの幼児期をおくっているこどもたちがどのくらいいるかといいますと、なんか非常に疑問に感じるところなんですね。その辺は細かくは議論することではないかもしれないんですけど、小学校に入るまでの乳幼児教育というのも、やはり国全体としてもっと重要視していかなければいけないことなんじゃないかなというふうに思います。

それと、こちらの配付していただきました資料の中で、県民満足度というところがあるんですけれども、児童生徒の満足度というのは非常に高くって、年々高くなっていくわけなんですけど、それが県民の満足といきますと、なんかすごく低いんですね。20 年度、高いといっても 19%って、これはどういう数字なのかなとちょっと思うんですけれども。いわゆる県民、大人だけが満足している状況が、この 19%ということでしたら、なんかこれはすごい問題があるんじゃないのかというふうに思うんですけれども。もし、その辺がご説明いただければ幸いかなと思います。以上です。

（委　員）

さっきの満足度の話ですけれども、私、これどういう検証結果か中身が分かりませんのでコメントできませんけど、ただ、前回の 10 年前に行いました教育振興ビジョンが着実に成果を上げてるということにつきましては、やはり我々の努力が無駄じゃなかったと感じます。

それから、前回のビジョン策定時に教員の任期制を作ったらどうかと申し上げたのは、実は私です。その当時、前嶌委員長と喧々諤々の議論をいたしました。三教組の書記長か委員長かなられました前嶌先生です。そのとき、前嶌先生は当然教職員を代表しまして、そんな教員任期制というのはできないと話したんですけれども、私の申し上げたのは、私立大学の先生方は多方面にいろんな努力をしている。教育力の向上、教員資質の向上をしております。そのときに、先生方非常にご負担は大変なんですけれども、緊張関係を持って自己努力、自助努力をすることがやは

り重要じゃないかということで、教員の任期制というものを提案させていただいたわけであります。

なぜかと申しますと、教育というのは上から目線で教えるから間違いが起きるわけでありまして、教育は共に育つという、子どもを教えながら、それから、子どもに教えられながら育つのが教育だという話をした覚えがあります。それでは、先生方の負担は大変でありましょうけれども、やっぱりこの総合ビジョンを動かすのはやっぱり現場の先生方でありますので、そういう意味では現場の先生方も資質の向上、教育部分の向上という点もどこかで置いておかなければいけないかと思っております。

それから、別にこの審議会の委員のクレームつける必要はありませんけれども、我々どうも上から目線で、こういう教育振興ビジョンをつくるときに、子どもたちの意見を、何が問題で何を言いたいのかということを我々が吸い上げる努力というのが必要でないかと思います。

前回したかどうか分かりませんけれども、子どもたちの意見をどこかで吸い上げる機会を一度持っていただきたい。どの現場になるか知りませんけれども、県民の意見の懇談会はありますけれども、子どもたちの意見をどこかでやはり聞く機会が、教育振興ビジョンの策定においては重要じゃないかと思っております。簡単に３点だけ、できればということでお願いいたします。ありがとうございます。

（委　員）

私は今、小学校におりますので、ちょっと自分の学校のこともお話させてもらおうかなと思っています。全児童が 350 名で、全学年２クラス、特別支援学級が２クラスの中規模な学校におります。子どもたちは今のところ、不登校もなく元気に通ってきています。現在、夏休み中なんですけど、教室棟と体育館の耐震補強工事をやっていただいておりますので、大変ありがたく思っております。

どういう学校にしたいかということは、やはり児童、保護者、地域の方々、教職員等、学校に関わるすべての人が輝く笑顔に溢れた学校を目指すということでやっております。先ほど、満足度の話が出ましたが、私もこの結果が本当にショックで、自分の学校でも子どもたちにも保護者にも調査をしていますが、保護者の方も 87%以上はいろんな面で満足してもらっているということなんですが、これは一般の方たちが学校に対してという、そういう意味なんでしょうかね。それにしても、本当になんか最悪でとてもショックでした。

今年、特に重点的に取り組んでいるのは、規則正しい生活をしようということです。早寝早起き、朝ごはん、それから、読書とか運動、お手伝い・仕事、家庭学習をやりましょうということで、子どもたちに話しています。特に早寝のほうができていないというふうに思いますし、それから、いろんなことがこどもたちでも二極化してきていまして、運動につきましてもスポ少でバリバリ土日や夜までやっているという子もいれば、外で本当にほとんど遊ぶこともないというような、そういう子どもたちもいます。家庭学習にしてもそうですが、保護者や地域の皆様のご協力を得ながら、そういうことをやっていきたいと思っています。

最近の子どもたち、本当にいいところもいっぱいありまして、毎日、私は子どもたちと楽しく過ごしているんですが、気になることはやはりきちんと座って話を聞けない子が増えてきたなということです。発達障がいの事例もありますけど、やはりきちんと躾けられてないという児童が多くなっています。それから、人と関わることが苦手という子もやっぱり増えています。

保護者で気になるのは、きちんと子どもに関われていない、子どもと向き合っていないという保護者が多くなってきたのかなと思っています。私は平成 17 年 18 年と三重県警察本部の少年課の少年サポートセンター長でしたが、そのときも感じたのは、親が子どもに本当に向き合えてない、家族は一応揃っているけど、でも、全部心がバラバラという、そういうことがすごく気になりました。

それから、やはり保護者の方も人間関係が希薄化しているという、つながりのない保護者の方が多いんかなというふうに思います。

人間っていうのは自信を持って前向きに一人で自立して生きる力と、仲間と他者と共に生きる力、この２つを付けなければいけないと思うんですが、子どもは三重の宝として、みんなで育てるという、そこら辺がまだ定着していないと思います。家庭ももちろんですけど、地域社会全体で育てていかなきゃいけないなと。そういうことが大事なんじゃないかなと思っています。

三重県というのは自然にも恵まれて、とてもすばらしいとこだと私は思っています。そういうふるさとに誇りを持って、子どもたちや若い人が本当に夢や希望を持って、そして、老人の方も

安心して暮らせる、そういう三重県にする、三重県にしなければならないなと私も思うんですが、こういうところでみんなで知恵を合わせて宝を大事にしていきたいなと思っています。よろしくお願いします。

（委　員）

私も経済人の一人として、私の時代というのは教育でここまでやっていただいて、本当にありがたいなと思っています。私の場合は竹下委員長さんと一緒で、東京で 18 年、55 歳まで、猛烈に伸びるホンダで全世界を走り歩いてきました。そんな世界から見たら、日本てすばらしいと思います。失業率も、大体先進国へ行くと５％から 10％の間は当たり前という中で、日本というのは大変少ないなと思います。貧困の格差も普通から考えたら非常に少ないと、そういうふうに私自身は思っているわけで、これは百年の計の教育が良かったんじゃないかというふうに思っております。

さらにこういうふうな形で研究をしていただけるとなると、大変嬉しく思っています。僕も帰ってきまして鈴鹿市でびっくりしたんですけど、学校の先生方から「苦情に対して、どう対応したらよろしいでしょうか」と相談されました。「いや、先生それ止めたほうがいいですよ。そういうのは民間に任したほうがいいですよ」と答え、学校問題解決委員会のプロジェクトをつくって、わずか５年ぐらいの間に、鈴鹿市の教育の中で困りごと相談が結構できるようになりました。そういうふうにして先生が働きやすい職場を作ってあげようと民間人の一つの教育への関わりとして取り組んでいます。

新しい時代への対応ということで、高校から私どもの職員をちょっと手伝ってくださいという依頼があり、２、３年、車の情報のお手伝いをさせてもらいました。「どこが違いますか」って伺うと、「最新の情報がくる」ってんですね、そうですよね、ハイブリッドとか電気自動車というのはそのまま学生に伝わるわけですね。そういう新しいことは民間が直ぐ教えてあげることができるというふうなことだと思います。

また、我々民間でやったことで、一つにはリサイクルセンターを造ったわけです。これも４年ほど前に造りまして、最初のうち環境とかなんかで、結構見学者が 2,000 人ぐらいみえて、４年経ってもずっと 2,000 人切らないわけですね。小中学校対応の教室とリサイクル館を造って、そしたら大勢来てくださって、職場の人たちが働いている姿を見ていただく。真っ黒で、それでしかもリサイクルで事務室とか、そういう世界を見てもらいます。「君のお父さんや多くの人たちがこうやってやってくれる、環境を大切にしているんだよ」ということを結構納得して聞いてくれます。そして、その場所ではホンダの現役の人たちが対応して、教育をしていただいているんですが、その人たちの驚くほど高い学歴を見て、大人になってもいろいろな職種でそこをめざしたいという子がいる。小中学校というのは僕らに言わしゃ、ちゃんとした夢を持って基礎をしっかり学んで、そこを教えてもらえば、後はその人たちについていく。

企業はまた、私どもに必要な人を育てていくというふうなことが大切ではないかなと、こんなふうに思っているわけですね。だから、我々も３月に鈴鹿のコミュニティというＦＭラジオ局をつくらせていただいたんですが、子どもたちのためにコンサートとかできる小さなホールを造りました。そこで自分の文化力を挙げてもらうのに使ってもらえたらな、今度は放送局へ行って語ってもらったらな、そして、広場でまつりをやっていただいたらということで造ったんですよ。結構すごいんですよね。民間というのは必ずそういう点でお手伝いするとこがあると思います。

私もこの学校教育に関わって、三重県の役割というのはなんだろうといったときに考えるのは、実行するというのは現場だということなんですよね。だから、ちゃんとした羅針盤をつくっていただきたいし、そして、僕らもここへ最初に参加させてもらって、ああ、県てこんなことを考えていただいているんだ、この中身をもっと精査して、我々が地域の教育にとことんお手伝いしていくことが、お返ししていくすべではないだろうかと思いました。我々にはそんなして育てていただいた人を、次を作る人間に育ててくという役割があると認識しています。自分の志したとこと違うとこに就職しても、基礎ができた人は何の問題ないと思います。夢は夢、やっぱりきちっとした教育の基礎をやってもらえば、あとはその大半を過ごす民間に任してもらえばいいんじゃないかなと思います。

だから、きちっとした羅針盤ですか、教育がこうあるべきだというのを答申して、そしてそれを現場は確実に実現していく。今回はお陰様で三重県の方でも作っていくということで、よく民間でいう三現主義、現場、現実、現金というふうな形を確認しながら、あとは我々が企業の社会的責任構造ということをくっつけてやっていきたいと思います。

リサイクルセンターも１万 2,000 坪の土地を市に提供していただきました。そして、12 億円という多額の投資があっという間に集まりました。ＦＭ局も同じです。そして大変な累損をつくったことも事実です。しかし、現実の中でそれを全部クリアーしてくれるのは職員です。見事に２期連続黒字。そして、しかも政府が求める 30%以上のシュレッダーダストを出さない、70%のリサイクル技術については 97%ですからシュレッダーダストはわずか３%以下となっています。でも、みんな現場の人たちが考えたんですよ。見捨てたもんじゃない。

私も子どもが２人いるんですけど、恥ずかしい話、私も女房と２人で共稼ぎで、ほとんどほったらかし。子どもと話したのは何かと言ったら、「親の責任は中学校までだよ。行きたければ学費は全部親が出す」ということぐらいです。でも 24 歳まで行ってくれて、恐らく見ていただいて、結構変な子には育ってなかったなと思います。非常に社会性の高い職業に就いてもらって、結構がんばっとるなと、見捨てたもんじゃないと思っています。しかし、我々はこういう方向性を出していくべきだということを答申していく中で、市町、そして民間企業、ＮＰＯ、県民など、多様な人たちの協働とか、連携というのを強くとるべきだと思います。

僕は日沖市長さんにいつも注目しているわけですけど、私もＮＰＯで女子ハンドボールチームを支援し日本リーグに行っているんですよ。約 20 人の選手たちを全国から集めて、全部バラバラのところに預かってもらっているんですね。しかもシーズンオフのときは小中学校のハンドボールの指導に行かせたりとか、そういうこともできます。どんどん教育の場だけではなく、社会全体でこれから人間力を上げていくということが必要じゃないかなということなんです。

私がバブルのときに感銘を受けたある銀行の頭取がこんなお話をされていました。「戦後、貯めた蓄財をすべて失った。当行に残っているのは人材だ」と、アメリカやヨーロッパから見たら、まさに 100 年に一度の危機ですが､日本はやっぱりバブルの失敗を反省しているなというぐらい、健全であるというふうに言えるんじゃないかと思います。どうぞ、そんなことで私はもう会長のもと、いい羅針盤をつくって、そして、それを実行していくのに全員でやっていくべきだと、こんなふうに締めくくりたいと思います。ありがとうございます。

（会　長）

一言だけちょっと私も委員の一人として発言をさしていただきます。何人かの委員の方からもご発言があったんですけれども、私自身教育の研究している中でずっと思ってきたのは、子どもたちを大人にする教育ということが必要だということです。特に現在、新聞等でも 18 歳を成人にしたり選挙権を与えようかとか、そういうことが議論になっていたり、あるいは裁判員制度が動いています。そういうことを考えると、やはり 18 歳ぐらいまでに、ある程度子どもたちを大人にする責務が社会にあると思うんですね。

その際に動物の場合は、ある意味で遺伝的なものを発現させていけば、大人になるわけですけれども、人間の場合は、大人になるためのある文化的な仕組みがないと、大人になれないという性格を持っていて、だから、私たちが教育の中でそういう大人にする仕組みをどうやって用意していくのかっていうことにかかっているのかなというふうに思っています。基本はやはり学力、そして働く力、社会性。人間同士がコミュニケーションをとってルールも知って、社会をつくっていく、これは働く力や学力とはまた別の力であるわけで、そういう力をどうやって総合的に付けていくのかということになる。その中で社会と、そして、できれば三重県を支えていく、そういう人材を作っていくようなビジョンができればと思っています。ちょっと一言言わさせていただきました。

それでは、皆さんからご意見いただいたわけですけれども、ここで教育委員の皆さん、何か特につけ加えることございますでしょうか。よろしいでしょうか。そうしましたら、教育委員の皆様、ここで退席されるということでございます。本日はどうもありがとうございました。

それでは、これまでいただいたご意見につきましては、次回以降の検討事項というふうにさせていただきます。事項として上げさせていただきたいと思います。

（事務局）

会長、すいません、先ほど、質問がございましたので、ひとつ説明だけ簡単にさせてください。

（会　長）

次回でもいいかなと思ったんですが、じゃ、お願いします。

（事務局）

じゃ簡単に。県民満足度ですけれども、毎年県がやっている１万人アンケートの満足度でございまして、大体、回答率は 30%から 20%ですので、3,000 人ぐらいの一般県民の方が答えておる

というふうに考えてください。選択肢は、５段階評価＋「分からない」の６択になっています。５段階評価の上２つを足したものが満足度となります。それが大体今のところ、２割ぐらいの人しか満足していないということにはなっています。また、不満足の割合が大体３割ぐらいございまして、若干不満足のほうが多く、また残りの５割ぐらいが、どちらとも言えないという、大体そのような形になっております。満足度は低いながらも若干上がりつつあって、実はここには表れておりませんけれども、21 年度も既に結果が出ておりまして、21 年度は 20.2 という数字になっていますので、微増ながら上がっているということでございます。

（会　長）

ありがとうございます。それでは、審議事項の（２）のほうに移らせていただきます。「次期の三重県教育振興ビジョン（仮称）にかかる基本的事項についてです。この点について事務局からご説明をお願いいたします。

（事務局）

それでは、簡潔に説明させていただきます。資料４、３ページになりますけれども、これをご覧ください。次期の三重県教育振興ビジョンにかかる基本的事項については、大きく３点ございます。１つ目が「１計画期間」でございます。それから、めくっていただいて、２つ目に「対象範囲」、つまりビジョンはどこまでを対象にするかという問題がございます。それから、６ページの一番上に３点目、「ビジョンの位置づけ」というものがございます。この３点について簡潔に説明します。

３ページに戻っていただきまして、まず、計画期間ですけれども、今回のビジョンにつきましては、10 年先を見据えた５年間としてはどうか。これにつきましては、もう少し噛み砕いて言いますと、ビジョンですので、先ほど皆さんの意見もございましたけれども、結構先を見据える必要があるということで、10 年先を見据えるんですけれども、この変化の激しい時代に、10 年間この計画を直さないで済むかというと、なかなか難しいだろうということで、期間は５年間としたいと。要は５年したらまた見直したいと、そういう意味でございます。説明は大きく３点書いてありますけれども、1 点目は現行の教育振興ビジョンももう 10 年も経ちまして、よく見てみると、やっぱり歪が出ていますよねということが書いてあります。5 つほど・をしてありますけれども、例えばゆとり教育が見直されましたけれども、それに係る整理をしっかり今のビジョンでできてないんじゃないかなという面があると思うんですね。ご覧のように「キャリア教育」、「食育」、「情報モラル教育」などの取り扱いの強化が今もう少し必要じゃないかとか、「学校経営品質」を導入しているけれども、もっと反映させる必要があるんじゃないかとか、「特別支援教育」について、もう少し整理が必要ではないかとか、こういった、10 年も経つとやっぱり少し歪が出てくるということがございますし、それから、（２）に書きましたように、さらなる時代変化を予測させる要素は枚挙にいとまがないということがあります。それから、３点目ですけれども、県政全体の視点から見ても、今、三重県全体のプランというのが、「県民しあわせプラン」ですけれども、16 年度に概ね 10 年先を見据えて策定されています。やはりこの県政全体のビジョンも、４年から５年後には改定される可能性があるだろうということなどございまして、中段のところ、以上のことから、ビジョンの持つ羅針盤としての役割をより確かなものにするためにも、数年ごとに方向性を検証することができるよう、10 年先を見据えた５年間ということにしておくと、そういうご提案でございます。

２点目は対象範囲でございます。ゴシックで書いた部分が案でございますが、今回のビジョンにつきましては、このゴシックの範囲内としてはどうかと。①②の範囲ということで、まず、①は教育委員会が直接所管する分野という意味でして、三重県内の公立学校教育、社会教育、スポーツと。それから、②につきましては、教育委員会が間接的に働きかけることのできる分野という意味でございまして、少し３行目ぐらいから読みますと、多様な主体等の協働・連携のもとに推進を働きかけることの分野ということでございます。なお書き以下は原則対象とはせず、三重県教育委員会との連携をできる部分については対象に含めるということで、大学、私学、それから、生涯学習ということを掲げさせていただいています。この説明は５ページに簡単にさせていただいていますけれども、まず、基本的な考え方ですけれども、このビジョンというのは、策定した後は数値目標を定めて、やっぱり進捗管理を行う必要があります。ですので、対象範囲は三重県教育委員会が、直接所管する分野と働きかけることの分野とするのが適切だと。自分たちが何の関与もできない部分をあまり書くのはやはり無責任だということで、こういう基本的な考え方をさせていただきたいということです。ただ、原則対象外ということを書かせていただきまし

たけれども、この３つについての説明を以下に付させていただいております。まず、大学と私学につきましては同じような考え方でございまして、それぞれの教育主体の教育方針とか、責任ある判断によって推し進められておりますので、こちらでその教育内容まで立ち入った記述をすることはやはりちょっと越権ではないかというふうに考えております。ただし、私学に関しましては、かっこ書きで書かせていただきましたように、中等初等教育の理念は三重県の教育を共に担う私立学校とも共有することが極めて重要と考えておりますので、ビジョンにその意向を十分反映させるとともに、策定後の運用の中で一層の連携に努める必要があると考えております。今日の委員の中にも、中津委員が私学から来ていただいていますけれども、そういう意味で来ていただいておりますので、よろしくお願いしたいと思っております。

それから、生涯学習につきましては、既に知事部局に所管が移っておりまして、ここには生涯学習振興基本計画というのが別途ございますので、教育委員会のビジョンとは一定棲み分ける必要があると思っております。

それから、６ページですけれども、位置づけでございます。実はこの今回のビジョンを教育基本法第 17 条第２項に基づく三重県の教育の振興のための施策に関する基本的な計画と位置づけたいということです。これは簡単にご説明申し上げると、教育基本法が 18 年 12 月に改正されまして、この 17 条第１項で国が教育振興基本計画を定めるということになったんですけれども、それと併せまして、第２項において、地方公共団体においても国の計画を参考にして、こういうのを作りなさいという旨規定されました。それはこのページの一番下に、〔参考〕教育基本法第 17 条の第１項第２項が示してありますけれども、この第 17 条２項の規定による計画に、今回のビジョンを位置づけたいというご提案でございます。説明長くなりましたが、以上でございます。

（会　長）

はい、どうもありがとうございます。それでは、この教育振興ビジョンの基本的事項ということで、計画期間、対象範囲、そして位置づけについて、今、説明いただきましたけれども、何かご質問やご意見等ございますでしょうか。

いかがでしょうか。それでは、ご意見は基本的にはないということで、この基本的事項について提案どおりにさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、３番目に策定の進め方についてです。こちらも事務局から説明をお願いいたします。

（事務局）

それでは、説明をさせていただきます。資料の７ページをご覧いただければと思います。策定の進め方、今後、どのようにこのビジョンの策定を進めていくかにつきましてですけれども、まず１点目は部会の設置でございます。この審議の深化充実を図るために、部会を設置することができますので、ぜひ設置いたしたいということで、３部会設置したいと考えます。

各部会では複数のテーマを審議していきたいと考えております。３部会は、教育振興ビジョン検討第１部会から第３部会まで設置したいと考えております。テーマでございますが、このテーマは次回に決定いたしたいと思っております。ただし、特別支援教育に関しましては、課題が大変多数ございまして、部会を早めに設置して、何度も議論する必要があるということで、この第１部会のほうに位置づけさせていただきまして、この後、資料６でご説明しますけれども、今日、この場で第１部会だけはメンバーを決めて立ち上げたいと考えておりますので、よろしくお願いします。

それから、(３)の委員の構成ですけれども、基本的には推進会議の委員の皆様にはいずれか１つの部会に所属いただくようにお願いしたいと思っております。それから、各部会には部会委員というのを過半数を上回らないだけ設置することができますので、別途選任いたしたいと考えておりまして、それぞれの部会の人数はここに書きましたように、第１部会から第３部会まで 10 名から 11 名で運営したいと考えております。それから、８ページ冒頭にありますように、必要に応じて専門の方を招聘したいと考えております。これが１点目の部会でございます。

それから、２点目は県民の方々の意見の把握でございますが、我々としては県民の方々の意向を今回のビジョンに反映させるために、３つの手法を考えております。１つは資料７にも出てきますけれども、地域別の県民懇談会を５回開催いたしたいと。それから、２つ目としまして、先ほど、委員から子どもの目線で意見を聞く機会を設けてほしいと言われていましたけれども、それも考えておりまして、中高生の懇話会というのをぜひ今年度中に行いたいと思っております。この(１)（２）は今年度中に行いたいと思っております。

それから、もう１つは、パブリックコメントでございまして、これは一定の中間案を取りまと

めた後において、来年、１箇月程度の期間を設定しまして、実施したいと考えております。

それで、全体のスケジュールでございますが、９ページに全体を示させていただきました。我々としましては、この教育改革推進会議を今年度４回、来年度５回の計９回想定しております。最後は来年度の 11 月の上旬あたりで決められたらと思っております。これは次の 12 月議会で議決なり承認なりを得られたらありがたいなと思っていますので、こういう日程を組ませていただきました。今日はこういうフリートーキングに近い形で行わさせていただきましたけれども、第２回目のほうはビジョンの体系とか、部会検討テーマ等を決定していきたいと思っておりまして、地域別の懇談会を 11 月ごろに開催をしまして、第３回以降は部会報告に基づいて議論を進めていけたらなと思っております。パブリックコメントは 22 年の 7 月ごろを予定をしています。

めくっていただきまして、今年度に限ったスケジュールをこちらに提示させていただきました。特にここでは部会の関係に注目いただきたいんですけれども、できれば第 1 部会を今日、この場で先行設置をいたしまして、今年度中に６回開催いたしたいと思っています。第２部会、第３部会のほうは、３回開催していきたいと思っております。

次に資料の６ですけれども、さっき説明させていただいたとおり、第１部会をこの場で設置させていただければと思っておりまして、実は部会に所属する委員は会長が指名するとなっておりまして、こちらで事前に案を用意させていただきました。第１部会に所属する委員はご覧の上島委員、太田委員、加藤委員、多喜委員、西田委員、脇田委員にお願いしたいというのがこちらの案でございまして、ここに名前の載っていない残り 14 名の方々につきましては、次回、決定いたしたいと考えております。第２部会か第３部会に属していただくということになります。

それから、第１部会の部会委員につきましては、ご覧の４名の方にお願いしたいと考えております。それから、第１部会の審議内容の中で、特に重要となります特別支援教育について、どのような審議をするかにつきましては、12 ページの上に書いてありますけれども、２点大きくありまして、今後の特別支援教育のあり方について議論をいただくのが１点と、それから、かなり具体的な話になるんですけれども、特別支援教育にかかる具体的な施設の整備計画についてというのが２点目です。既に第１次計画が走っているわけですけれども、これが 22 年度をもって終了しますので、23 年度からの第２次計画の議論をしていただきたいと考えております。以上、策定の進め方の全般に対するご説明でございました。よろしくお願いします。

（会　長）

それでは、まず資料５の策定の進め方についてですけれども、３部会を設けてということと、それから、その他県民の意見の把握等を行なっていく。そして、今後のスケジュールについては、全部で９回、２回目は 10 月にまた行うと、こういうようなスケジュールで行うということですけれども、何かご意見等ございますでしょうか。

（発言を求めるが発言なし。）

それでは、そのような形で全体を進めていくということでご了承いただきました。

それから、資料６の方の当面、第１部会を特別支援教育を取っ掛かりに、設置するということについて、そのような内容、そして委員さんの構成や特別支援教育の課題についても説明をいただきましたけれども、この第１部会を設置するというこのことについていかがでしょうか。

（発言を求めるが発言なし。）

それでは、もうこちらの委員さんは早速でございますけれども、どうぞよろしくお願いいたします。それでは、３の策定の進め方については、これでご了承、

(挙手あり)

はい、お願いします。

（委　員）

基本的に原案に賛成ですが、第１部会に会長さん、副会長さん、どちらも入ってくれてない状態です。振興ビジョンを作成する取りまとめをお願いせんならんところで、お２人に迷惑かけるわけですが、後の第２、第３部会も推進委員を６名にしておいて、会長さん、副会長さんは３部会のどこにでも入っていただくような形にして、部会の分と全体の分を連携を取ってもらってしていくのも一つの方法ではないかなと思います。どちらも必ず全部入れということではなくて、大変ですので、お２人どちらかの中で３部会の方にも入っていただいてもらうということも、いろんなつながりも大事ですし、検討してもらえないでしょうか。それが不可能でしたら、部会の長になられる方と、会長、副会長さんの連携をやっぱり密に取っていただきたいと思います。長期にわたる部分もありますし、大事なところですので、やっぱり取りまとめをしていただく会長

さん、副会長さんが中身を十分分かってもらわないと、果たしてどうなるかなという気もいたしますので、そこらちょっと感じさせていただきましたので、良いように考えていただいて結構かなと、このように思います。

（会　長）

この点につきましては、今のところ一応これで確認しておいて、また10月の時に具体的な委員構成、部会設置のところで、提案をさせていただきたいと思います。

他にいかがでしょうか。それでは、この資料５、資料６については基本的なところではご了解いただきました。

それでは、４番目、地域別県民懇談会についてです。こちらについてもご説明をお願いいたします。

（事務局）

それでは、資料の15ページ、資料7をご覧いただければと思います。「三重の教育のあるべき姿」にかかる地域別県民懇談会についてということで、この案のとおり開催させていただければと思うんですけれども。目的は先ほどからご説明させていただいているように、県民の方々の意見を聴取したいということでございます。開催時期は11月中の土曜日、日曜日を考えております。それから、開催場所は、現在の三重県のしあわせプランでの地域が５地域に分かれていますので、その各５地域でしたいという意味で５会場ということを考えております。参加者はやはりあまり多くても意見は聞ききれないというか、意見を言っていただけないということもございますので、20名程度を想定しております。それから、教育委員やこの場の教育改革推進会議の委員さんにもどこか１つ来ていただければありがたいなぐらいの感覚を私どもは持っております。それから、教育委員会の事務局の幹部職員ということで、こういう参加者で開催したいと思っております。時間は２時間程度。内容はフリートークと。資料としまして、最近の重要な教育課題等を取りまとめた資料を作成して事前に配付しておこうと、そのように考えております。参加者の募集を10月に行なおうというふうに考えておりまして、現在、県政だより等でＰＲすることを計画しております。

それから、めくっていただきまして、これは参考ですけれども、10年前もこういう県民懇談会をやっているんですけれども、変更点は土日の開催としたということと、会場を５地域としたということでございます。それから、参考の２でございますけれども、これは今のところの想定でございまして、５回はこのような日程でやりたいなと思っております。１点、修正がございまして、この資料を作ってから、急遽変更があったんですけれども、11月21日津市、県津庁舎６階大会議室が61会議室ということで、できればさせていただきたいなと思っております。大会議室はあまりに広すぎますので、もっとよい部屋が見つかったということで、こういうふうな想定をしております。説明、以上でございます。

（会　長）

地域別の県民懇談会を11月に５会場で行うということですが、何かお気づきの点ございますでしょうか。

それでは、このような形で進めさせていただきます。教育改革推進会議の委員の皆様、任意参加ということで、また、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、最後、その他ですが、何か事務局はございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、なければ本日の協議はここで終わらせていただきます。本当に時間の延長をして申し訳ございませんでした。ご協力を感謝申し上げます。ありがとうございました。

それでは、あと事務局のほう、お願いいたします。

（事務局）

それでは、どうも山田会長、議事進行ありがとうございました。

事務局から次回会議の開催時期につきましてご連絡させていただきます。皆様には既に日程調整の方お願いしておりまして、ご都合のいい方が多かった10月の５日でございます。10月の５日月曜日でございますけれども、午後２時からここ、プラザ洞津のほうで開催させていただきたいというふうに思っております。それぞれお忙しいこととは思いますけれども、ぜひご出席の方、よろしくお願いいたします。

それと、もう１点、事務局からの連絡でございますけれども、事前に報酬・旅費申請用紙というものをお送りしております。これにつきまして、今日、お持ちになられましたら、また受付のところで担当の者にお渡しいただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

それでは、これをもちまして平成21年度第1回三重県教育改革推進会議を閉会させていただきます。本日はお忙しい中、ご出席いただきましてありがとうございました。

（閉　議　16時55分）